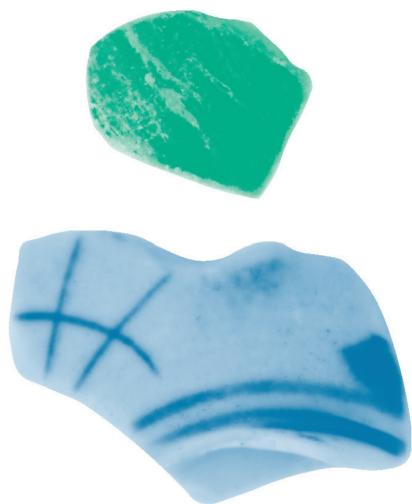


Figures



2026年 8 月号 (No.4)

Perdu ce vin, ivres les ondes !...

J'ai vu bondir dans l'air amer

Les figures les plus profondes...

Paul Valéry “LE VIN PERDU”

消えたこの葡萄酒、^{ほのか}微に酔った波……

俺は見たのだ、潮風の^{にが}苦い空の中に

この上もなく深々とした形象の躍り上るのを……

ヴァレリイ「消えた葡萄酒」(鈴木信太郎訳)

目 次

季節を運ぶ風

熊本地震の報に接して	2
------------------	---

壊滅（空襲の日々）	角谷次吉	4
「壊滅（空襲の日々）」の解題	角谷有一	16
音羽診療所の事	遠藤雅樹	18

短歌：エチュード（二）	遠藤雅樹	20
とうがらしの湯呑と「ボードレールの肖像」 ..	遠藤雅樹	21

中島敦「古譚」論 その二

・「文字禍」を読む	角谷有一	27
《参考資料》文字禍 中島敦		37

編集後記	43
------------	----

装画：平尾堇

季節を運ぶ風

熊本地震の報に接して

今年七月二八日、熊本県でマグニチュード7.1、最大震度7の地震が起こった。二〇一六年の熊本地震から一〇年、あの時と同じ規模の大地震だ。一〇年前の四月には、二度にわたって震度7の地震が熊本地方を襲い、二七六人が亡くなり、三〇〇〇人近い負傷者が出た。そして、熊本城の一部が石垣と共に倒壊、崩落する場面がテレビに映し出された。

今回の地震は、そんな記憶が少しずつだが受け止められるようになってきた矢先の出来事だった。

この一〇年間、熊本では、様々な形で地震対策がなされてきた。その成果は今回の地震でも確かに生かされているはずだ。しかし、こういう災害に際しては予期しないことも起きる。今回は、本震発生から一時間後に、熊本市内のイオンモール熊本でガス爆発事故が起き、大きな被害をもたらしたのだ。買い物客や従業員の見守りを終えて、一部の従業員が残っているときに起きた

事故だった。夏休み中のことでもあり、イオンモール内の様々な施設には多くの来客者がいたという。本震後わずかな時間で来客者全員の避難を終えることができたのは、十年前の地震の教訓から学び、訓練ができていたからであろう。しかし、避難を終えた直後に建物内で大規模な爆発が起こり、二階部分が崩落し、建物内に残っていた人たちが巻き込まれて死者や負傷者が出る大事故になってしまったのだ。

事故後の記者会見では、イオンの経営者、現場責任者を厳しく批判する声も聞かれたが、まずは、原因を徹底的に究明して二度と死傷者を出すような事故が起こらないようにしっかりと対策を立てることが重要なのではないだろうか。

また、東日本大震災や前の熊本地震、二年前の能登半島地震でも起こったことだが、地震発生後のデマ情報が今回も拡散されている。いわく、「生き埋めになった。助けて」という偽の救助を求める内容がXに投稿され拡散したり、イオンモールの爆発は、「外国人による放火だ」というデマが流されたりした。こういうデマや悪質なヘイト情報は、災害時のパニック状況のなかでは次々に拡散され、恐ろしい悲劇をもたらすことがあることを私たちは過去の経験から学んでいるはずなのだ。百三年前の関東大震災直後、「朝鮮人が井戸に毒を撒いた」という悪質なデマの拡散によって、多くの朝鮮人や中国人たちが虐殺された事件のことは、災害が起こるたびに、しっかりと心に刻んでおかなければならない。

先日、朱喜哲（ちゅ・ひちよる）氏の『バラバラな世界で共に生きる リチャード・ローティの哲学』というNHK出版新書を読んだ。リチャード・ローティというアメリカの哲学者の思想を研究する四十代の著者の新著だ。朱氏は、ローティの哲学が、現代の「対立」と「分断」の中でバラバラにされてしまった私たちに、共に生きる道を見出すヒントを与えてくれるのだと訴えている。

永遠不変の真理や絶対的な正義といった、西洋哲学が求め続けてきたあり方をローティは見直すべきだという。そして、バラバラになった私たちはどのようにして他者と共に生きていけるのか、と問いかけて、その出発点は、「残酷さこそ私たちのなし得る最悪なことだと考え、それを避けることを求める」ことだというのだ。では、どうすれば「残酷さ」に対する感性を磨くことができるのか。その問いに対して、小説のようなフィクションやジャーナリズムの報道のような当事者の苦痛や苦境を内側から描いたものに触れて共感すること、さらに、自身も加害者たり得ることを受け止めること、それによって「残酷さの芽」に意識を向けることができるようになるのだと、朱氏はローティの考えを解説して答えている。

この著書で、ローティが、歴史の偶然性の中で生きる一人ひとりのバラバラの人間がどのようにして「連帯」できるのかを探っていく過程を、朱氏は分かりやすく解説している。ローティは、そのために「会話」が最も大切だというのだ。ここで言う「会

話」とは、一つの正しさや結論をめざす「探求」や「対話」ではなく、行き着く先のない、お互いの向き合いを通じて他者と共にいることによって連帯を探る行為のことを言うのだ。

今回の熊本地震についても、様々な報道や現場の状況に触れ、そこで見聞きしたことを感じたままに他者と語り合うことによって、自分の「残酷さ」に対する感性広げることができることも確かだ。災害報道に接した私たちに求められるのは、出来事を消費することではなく、それについて語り合い、他者の苦痛に対する感受性を育て続けていくことではないだろうか。そして、そのような営みを通して、自分がどのような形で他者と「連帯」できるかも見えてくるのではないだろうか。

（乾）

壊滅（空襲の日々）

角 谷 次 吉

壊滅

人はどの様な土地であろうとも

己が生命の種を育くまねばならない。

我々はこんな土地の上に青春を育んだ。

夢は我々の運命に何かを暗示するものに違ひない。或一つの夢がくつきりした輪郭と、不思議な甘い感じで、又頭に浮んで来た。自分は旅人となつて、雪の一二寸つもつた野を歩んで行く。雲は低く、黒に近い藍色にたれこめてゐた。と気づくと私は野ではなしに、その野を走る一本の線路の横路をとほ／＼と歩いてゐた。空気が明るさをおび、何かスイートな香気が漂つてゐる。その一すじの線路はどこまでも／＼伸びてやがて地平に没してゐる。その傍を私は歩き続けて行くのである。どこまで行くのであらうか、たゞ我は無心に歩むのである。ところがその線路

の上を貨車がやつて来る。中は石炭が積み上げてあり、それが黒々と濡れてゐる。

段々近づくに従ひ、石炭だと思つてゐたのが、そうではなくて、女学生が沢山貨車の上に坐つて、合唱してゐる。

勤労作業の帰りでゞもあらう。

今空は雲が一直線に、彼方より私の頭上を越えて裂け、雲の裂け目が金色に輝く日蝕のコロナーの如くに。

太陽は没せんとする前の最後の光輝を、その切れ目より地上に注いでゐる。夕陽は貨車の後に没せんとするのに。

女学生達の姿は黒い影画にはならないで、その顔々は不思議な光で輝かされてゐる。彼女達は労働の心地よき疲れと、活々とした表情を含んで、猶もコーラスを続けてゐる。美妙なる夕方の光りとコーラスの声とが解け合つて、旅人の我が心を甘く柔らかに包んで行くのであつた。

この夢から覚めた時、私の心は豊かな幸福な感じに浸されて猶も夢の後を追はうとするのである。而もこの夢は焦燥と、何とも知れない恐怖とで安からざる夜々の後に来たので、私には天恵の救ひの様に有難く感じたのである。

その後、屢々頭に浮かんでくるのはこの印象的な絵の様な夢と、それをつゝむ柔らかな幸福な感じとである。その為に私には運命の途上できつとこの光景に遭遇すると云ふ事をどこか心の隅で確信するやうになつた。この様にして春を待つ心は準備されたが、外界はまだ／＼暗澹たる雪雲に閉ざされてゐるので

ある。

二、東京(注) 昭和一九年一二月であらう)

この月の終わり頃には、私は医科の試験をうけるために、東京郊外の伯父の家に在った。東京は將に徹底的破壊の一步手前に朔風と寒氣の元にふるへてゐた。

単機哨戒偵察と攪乱の意図のために、毎夜二度三度とサイレンは人々の耳を打つのである。ラジオのブザーが気味悪く、氣持をかき立てる。サイレンとブザーは人々の生活を支配し、それによつて我々の生活は引づられ、切断され、無目的にされるのである。

静岡に侵入の情報が入ると暫くして爆音がぐんぐん／＼せまつて来る。我々はもうとつくに防空帽と鉄甲を装けて外にでゝゐる。探照燈がかつきりと十字に組んで敵機の進行と共に動いて来る。高度は大抵一万近辺らしい。高射砲彈の炸裂がちか／＼と機の周囲をとりまぐが、殆ど無効で機はぐん／＼と帝都上空を飛行雲を引きつゝ飛び過ぎて行つて終ふのである。時々は焼夷彈、爆彈を投下して去ることもある。人々は寢床へ又かへる、地上あらゆるものは凝結し、足元で霜柱がさ／＼と崩れる。これらの日夜の間に、或周期ををいて、昼間の大挙爆撃が行はれるのである。

戦ひの惨烈さ、それを私は想像もし、書いたもので見もした。そして、そういう坩堝の中でこそ人間は總ての付帶物を脱ぎ捨

て、第一義に徹し得られるのだと思ひ、又その決心で出て来たのだ。ところがどうであらう、夜と昼の区劃がとりさられ、生活の規律が不規則にならざるを得なくなつた今、頭の底は不氣味に澄みながら、そのまま氷つて終つた様に全然自由を失ひ、只々日々の流れに引かれて行くのみなのだ。

その無氣力と戦ふ事が東京生活の第一歩となつたのだ。先づ私は土台を、自己が依つて立つべき土台を確立しやうとした。それならば土台とは一体何であらうか、私は自分に尋ねた。もう一方の自己は、私に、「今頃まだ自分の土台を尋ねなくてはならないとは何といふことだ。」と罵り返すのである。自分の怠惰を今更悔ゆとも、どうならう。その時いつか見たかの夢が私の頭に段々浮かんで来た。その鮮麗な画面と豊かな音楽が、焦燥から安静へ、徐々にではあるが快癒の途へ連れ出してくれるのである。

そして、カロッサが戦中日記の冒頭に掲げた

“Raube das Licht aus dem Rachen der Schlange!”

蛇の口から光を奪へ

の句がピツタリ眼の前に擡出された。この意力なのだ。無氣力の縁より吾を駆り立てる希望の光が小さくはあるが輝き出して来た様に思はれる。

あらゆる悲惨の極、暗黒の底に於かうと必ず光の種子はまかれてゐるのではなからうか。さうだ、それをひろひ取り我々は豊かな土地におひ育て、行かねばならないのだ。

氣を入れて勉強をする間もなく試験は目睫にせまった。とても郊外からは通ひ切れないので友常（歯科学士の頃からの友人）の所に試験中泊めて貰ふことにした。とかくする中に試験は一日一日と終つてしまつた。何故もつと準備しなかつたのか、それが悔まれてならない。熱願冷諦と云はれるが、熱願が足りなすぎる。願ひと諦めが同居し、時のまに／＼流される自分が余りに不甲斐ない。「真に一つを願へ、かくして燃えるが如き意欲で遂行せよ」と私は日記に書き込むのであった。

朝（㊦） おそろく二月一日であらう、まきを切つてゐると空襲警報が出る。しかし、東京に侵入することなく去る。昨夜は出番のため三度起こされて張番をする。そのためか朝の日の光が妙にまぶしく、まぶたが重い。而し冬の朝は、物みながキーンと張り切つてゐて、霜柱のとけかゝつた土の色まで実に鮮やかだ。日の光まで、いかにも直線的に稲妻の様にチカ／＼する。その陽光の中でまきを私は切る。シャリン／＼とのこぎりが気持ちよく鳴ると木はまたたくまに切れて行く。おがくづがふえるにつれ、体がポツ／＼と暖かくなる。

今日は此間からの提案で餅をつかうと云ふのである。もう釜の湯は煮えたぎつてゐる。さあセイロをのせよう。かくしてその日の餅つきは始まつた。

午後三時頃辻井（㊦） 小松中学時代から友人で東京帝国大学医学部の学生）来る。彼三四度杵を振つてついた。薄暗くなる

頃にはもう終ひにすることが出来、我々は夕飯にその日の結果を賞味する事が出来た。辻井と今船舶隊に入隊してゐる後藤（㊦）辻井氏と同じく小松中学時代の友人）に書きをかく。彼の入隊の日の姿を思ひ浮かべながら。大分遠い市中に住む辻井は、そろ／＼帰りにつかねばならぬ時間となつた。二人は連つて外に出た。夜空はさえ切つて星の世界である。

こんな日を恵みつつも爆撃行は益々激烈さを加へて来たのである。

その内に試験結果が発表され、私は幸にも入学を許された。四月入学迄一ヶ月、国に帰つて無駄に徒食するのも心もとないと思つて知り合ひの人に頼んで巣鴨の方の外科病院に通ふことにする。

今日は、夜中からふり出した雨が午前中は止みそうにない。その上、昨夜は二時頃迄起きてゐたのがたゞつて鈍い頭痛が私を憂鬱にする。行かうか止めようかとためらつてゐたが、とにかく行かうと外に飛び出た。春まだ早い冷雨が頬をうつ、眼鏡は忽ち水滴で濡れすべての物が泣いた様にゆがんで見える。傘はない故、頭巾をかぶつて来たが、駅に着くまでにはもうびつしより裏迄濡れ切つてしまつた。郊外電車の小さなプラットは一杯の人だ。此頃は郊外電車の無茶苦茶な雑踏、運転系統の乱雑さは、人々の常に口にするところであつた。三十分、一時間待つことは普通で、それでやうやく車が来ても乗れない事は再

三である。かけ声もろとも押し込まれて電車は動き出す。人々の顔面は硬直した様に見える、たゞ何物かにつかれて動いてゐるとしか思はれない。車中では必ず喧くわの一つや二つは起る。「馬鹿、それでも日本人か」「馬鹿とは何だ」等々、罵り合ふ、いがみ合ふ。傍では押されて悲鳴を上げる者、ガラスの破れる音、将に現在の日本のいらだたしさと、棄鉢氣分の縮図である。

駅より十五六丁の道を歩く横に何が起ろうが目に入らない、ぼう然として歩む、只、眼前二三米の道路だけ見て。

病院に入ると患者が廊下に一杯待つてゐる。頭に指に腕に白布をまいた人々が自分の番を待つてゐる。看護婦が五六人いそがしさうにガーゼ交換をしてゐる。膿盆に汚れたガーゼが次々と剥がされ溜まつて行く。見てゐると、看護婦がピンセットをもつて来たので自分もすぐさま一人の患者のガーゼを剥がし傷口を見る。ひやう疽（癰疽）で切開をほどこした後である。新しいガーゼをつめかへて帰す。幼児の頭である。表皮が全部はがれて赤く丸坊主になつてゐる。湯気が臭ひ共になしげにはかり／＼と上がる。その子は泣きじくりながら母親の乳房にすがつてゐる。半島人の夫婦がある。女が指を治して呉れと云ふのである。一週間前に杵で指を叩き潰して離れてしまつたので自分で縫つたと云ふ。もう先は黒く腐つてゐる。何とかして指を元通りにしてくれと頼むのであるが、素人目にも全然これは駄目である。ガーゼをかへる度に悲鳴を上げて天にすがり附く。

外は何時の間にか晴れ上がり、室も大分明るくなつて来た。

雑とうを極めた患者も次次に処置され、残り少なくなり、時計は何時の間にか昼の近づいたのを告げてゐる。

医局員控室とふだので、ゐる部屋に入つて冷え切つた弁当を一人ぼ／＼食つてゐると、部屋の薄暗さと飯の冷たいのとで腹の底から寒々として来る。湿っぽいオーバを着て襟巻きをする。片隅の小机の上に外科書が一冊のつてゐる。所在なさに手にとつて開く、アート紙が更に気分をつめたくさせる。四角な活字とインキで引いた赤線、数多い図ばんのみが眼を過ぎる。到底頭に入りさうにない。暫く杲然としてゐると窓をふるはしてサイレンが鳴り出した。近頃は大方図々しくはなつてゐるが、やつぱり氣持の良いものではない。情報、敵一機は帝都上空を侵入しつゝ、ありだ。一機なら大したことなさうだといふ横になる。煙草に火をつけようとしてポケットをさぐつたがマッチはない。あちこち探してゐる内に紙片がで、来た。鼻紙かと思つてすてやうとしたがふと見ると、それは昨夜書きすてゝておいた詩である。古雑誌を見てゐたとき西欧の、自分の知らない詩人のつくつた「心に太陽を持て」と題する詩を読んで、心より嬉しくなつて自分も書いて見たのだ。朝の雨でそのノートの切端にかいた字はインキがにじみ読みにくく、はあつたが、口の中で読む。

「心に太陽を持て」と西欧詩人は云つた。

その言葉をすなはに受けようではないか。

暗雲は地をはひ、乱れ飛ぶ雪は頬を打たうが、

太陽を信じやうではないか。

堂々と徑廻る太陽の運行

冬去りなば、春は来るのだ。

困苦に耐へた人に、その時光はそ、がれるのだ。

言葉は貧しく生硬であるが、春を待つ心、それまでけん虚にすべてを耐へ忍ぼうとの氣持が陰惨な自分の今の氣分の中に暖かさ何ものへとは知れない或決意を与へるのであつた。

午後は入院患者の回診である。数日前の爆撃で、この病院の近くも大分被害をかうむつたので、傷をうけた人が数多くかつぎこまれて、殆ど一部屋に五六人づつ収容されてゐる。焼夷弾で傷をうけた人が大部分である。部屋に入ると途端に傷口よりでる分泌物、膿汁の臭ひ、肉の焼けただれた臭ひ等——度かいだ人には忘れ得ない臭ひがうつと胸にせまる。直ちにガーゼ交換が始る。爽やかな薬品のほひが幾分息を軽やかにしてくれる。私は竹の床で固定した十六七の娘さんの繃帯を解き始める。彼女は憤ほろしさうな眼でその左腕を見、ついで私の眼をにらんでゐたが、くるりと壁の方へ顔を向けた。そんなことに我々は頓着してはならないのである。血と分泌物でこはばつた繃帯をどん／＼解いて行く。前膊の中央部の所は半分位も切断され、傷よりも先の方は貧血のため蒼白になり、傷より肩にかけてむくみのために随分腫れてゐる。到底今後、このまま保存することとは不可能の様に思はれる。しばらく後には切断されねばならないであらう。そして腕をとられた娘の地上に於ける生活はど

うなるだらうか。と一瞬考えたが、看護婦はその時はもう手際よく竹の床を当て繃帯をする／＼とまいて行く。すぐその娘の頭のベッドに四十位の男が寝てゐる。大腿部に破片が当たつて、神経を傷つけたのだらう、傷が小さいにか、はらず劇痛に顔をゆがめ歯をくひしばつてゐる。臀部をがつぷり鰐にでも食ひとられた如くに肉と脂肪のはみ出した者、顔面火傷で顔中すきまなく繃帯した人、これらの人が安静を求めて、己が苦痛につきめめされてゐる。これらの一人々々、その傷の一つ一つが、一つとして時代の苦難を語つてゐないものはないのである。幾万の人々が現在これらの苦痛にあへいでいるか、又将来どれだけの人々がこの苦悩を背負はされるのか、戦争の悲惨さは時々刻々我が眼の前のボールを引きさいてその真相を露はして来るのである。

一部屋／＼と回診はてきばき／＼とすまされて行くと附そひの看護婦があはた／＼しく院長のところへ走つて来て患者の重態をつげた。すぐ様カンフルとカフェインが注射器に満たされ、我々は二階のその部屋に急ゐだ。患者といふのは六才位の女の子で左足火傷、右側は附根より切断、左前腰骨折で、火傷のため自家中毒を起こしてゐた。眼の色はもう地上のものではなく、彼方を見て笑つてゐる様である。昨日見た時も痛みは殆ど感じなかつた。もう苦痛の域すらも過ぎて終わつてゐるのである。

院長はすぐもう駄目だと見てとつたらしく、形式的に脈をと

小さな生命をほんの一寸でも長びかせようとした。

小鼻を広げて呼吸をしてゐるが、それがもう死の来たことを知らせてゐる。何等苦悶の跡も見せずまぶたは何時の間にか軽くとしてゐる。その横のベッドに寝てゐるのはその子の近所のをばさんでもあるらしく、自分の傷も忘れて起き上がり、死にひきずられて行くねむりを覚まそうと「菊ちゃん」と叫び「可愛さうに／＼」と泣きながらよび叫んでゐる。もう小母さんの叫んでゐる中にこと切れてしまつてゐた。院長は形の如く人工呼吸をやつてゐたが、総ては無効に、死への歩みは冷酷に、確實に、幼き生命も運び去つて終つたのである。この子は、この小母さんと共に一つの壕に退避してゐたが同時に被害を受けたものである。昨夜此の子が美しいおべゝを着たい、着たいと云つた、と小母さんが泣きながら語つた。親にも知らせはしたいのだが、小さい女の子は両親の腕に抱かれず冷たいベッドの上で死んでゐた。自分は何ものかに対する憤懣、こんな小さいものにまでといふ憤ほろしさ、あまりな憐さにわつと泣きたいのをやうやく压へたが、いかにこらへても涙が次から次とあふれるのであつた。

死は如何なる死でも厳肅なのだ。悲哀をたゞへた厳肅、死の瞬間に宇宙の根元がひらめかされるのだ。

院長は骨折して居る左手をとり静かに動かした。骨と骨との触れ合う稔髪音がかすかに響く。我々にそれを示し、医学用語を使ひながら種々の症状を説明して呉れた。医師としての理性

の眼を以て物を視ることの必要なことは、若い我々には痛く感ぜられた。感情的に泣き叫ぶことは治療にとつて害こそあれ益はない。我々は最善の理性を働かして、確実な技術でもつて治療を遂行せねばならない。そう行へる様に努めねばならない。然しそれと共に我々は人間である。生命に対する畏敬の感情はあくまでも硬化することなく、敏くなければならぬ。

空によどむ雲は黄色く、枯々とした光景が窓外に見える。薄暗く沈んだ死の部屋、ベッドの白布のみが白々として動かない。一日の陽が静かに幼児の死の如く沈んで行く。明日の蘇生を予感しつつ。

今年(註 昭和二〇年)は例年になく雪が多い。東京にも春先の雪が二尺以上も深々と降り積もり、一時交通機関にも多くの支障を来した。汚穢乱雑を清浄に蔽ひつくし、晴れきつた冬空の下に光輝に燃えてゐる。故郷の雪景色には絶えて見られない光の乱舞である。而しその雪も幾分暖かになつた陽光のために、間もなく庭の下隅、日影の雪をのこして消えていつて終つた。一日二日と病院生活も過ぎて行く。今日も一日の務めを終つて駅へ帰途についた。朝からの曇り空も幾分薄れて所々に雲の裂目も見られる様になつた。疲れと、あたりのながめの影響で、私の心は荒れよどんだ憂鬱に沈んでゐた。電車を待ちあぐんでゐる人々の顔にもその様な冬の夕暮れの寒々とした色が隠されなかつた。春近くではあつたが、夕陽は地平に平行に人々を陰

氣に照らしてゐる。

而しその私達とは著しく対照をなした国民学校の児童と思はれる一団が、銘々大きな荷物を背負つてはゐるが、何ら重荷とは感じない風にやはり電車を待つてゐるのだつた。後で分かつた事だが疎開地から親元へ帰つてくる途中なのだ。

電車はやうやく私達の前に入つて来た。いつもの様に電車はひどい混み様である。罹災した人々はやつと出した釜とか、こげて穴のあいた蒲団とかを抱きかゝへて乗つたが疲れ切つた顔は煙でかゝ又はほこりのためでかゝ、薄黒くすゝけてゐる。私は、まとまりなく、ぼんやりと、憂鬱な気分で、つり皮につかまつて、見るともなしに窓外を見つめてゐた。そして電車の揺れでハツと我にかへるが、又元の氣分に沈んでしまふのだ。暫くして何度目かに我にかへつた時子供達の歌声が耳に入つて来た。一人ふえ二人ふえ今では電車中の子供達が合唱に加はつてゐる。すぐ前の二三人の女の子もお合羽頭を可愛くふりながら、弾んだ声で歌ひつゝ、瞳は嬉しく輝やいてゐる。子供等は、己が歌にうたひほれて、怖れも悲しみも知らない国に蝶の舞ひとまつてゐるのである。

私の氣分は段々軽やかに、靄は次第に薄らぎ、光が時々きらめく様になつて来た。心に太陽をもて、子供等は太陽の子だ、唇に歌をもて、彼等は今体中が歌だ。私は涙ぐましくなつて来た。乗合せた人々も、罹災した人達のせまつた眉も、ほつとゆるんで来たのであつた。

もう木梢にせまつた夕陽も、春を告げる様な柔らかな光を投げてゐる。春は来るのである。如何に冬が厳しからうと、長からうと。早緑の芽ばえが正に地上に萌え出やうとしてゐるのである。子供達の歌声は、清く柔らかく、夕映の電車の中をしたして行くのであつた。

一昨日の空襲で本郷がやられたとのことなので、学校はどうだつたらうかと思つて出かける。バスで目白迄行つたが途中で警戒警報、続いて空襲警報がかかる。目白駅前の待避壕に直ぐもぐり込む。電車が着く度に人々は、あはたゞしく、くもの子を散らす様に四散する。だれの頭にも眞深く防空帽か鉄甲がしめられる。女の人が一人財布をなくしたと云つて涙声になつてをろ／＼する。そして外に飛出して行く。壕内も段々に静かになつて総ての注意は耳に集中してくる。此頃では人々の耳は爆音に対しては敏感になり、機種、高度等は大体の区別が出来る様になつてゐる。時間は三十分、一時間とたつがまだ敵機は来ない。注意力も段々と解けてきてタバコをふかす者、話をする者もでゝくる。罹災の話、食料の困難、戦況の事等。而し人々の様子には、今、国家興亡の機也といふ氣鋭の感じはどうも見られない。どこか知ら鈍く澁んでゐる。

やうやく警報も解けたので、すぐ電車に乗る。駒込にてをりたが市電は動ゐてゐない。大分損害のあつた事と思はれる。歩むに従つて破潰、火災家屋が多くなり、肴町より、追分と焼け、農学部迄累々と赤茶けた煉瓦、石等の原となり、まだ所々に煙

をくすぶらしてゐる可燃物もある。辻井の下宿は九分まで駄目だらうと思はれたが、焼け石や瓦を踏み分けてその見当と思はれる方に歩いて行つた。家や、あの森は、さうだ下宿の隣のお寺だ。これなら大丈夫だ。奴、さぞ驚いた事だらう。入つて聞いてみると、今彼は留守との事だつた。通りへでて進むと、赤門前より惨たんたる光景が眼前に広がつてゐる。市電の電線がたれ下がり、電柱は炭の棒と化し、全く根元より焼け落ちてしまつたもの、片面のこげたもの等、又、道路に敷きつめてある木煉瓦迄が黒くこげてくぼんで居るのを見ると、どれ程火勢がひどかつた事かと思ひやられる。今歩むこの道、焼け落ちた家並、これは自分の東京生活の最もなじみ深い道路であり街であつた事が痛切に感ぜられるのである。我等が呼吸し、歩み、話し合ひした青春の幾年かの思ひ出となるべき街や道は現実にはもう見られないのだ。私の前後左右はリヤカーでか、手にもつてかした人々が焼け残りの、なんの値打ちもなさうな物を運んで過ぎる。

一丁目のロータリの所でふと顔を上げると、向ふから来る人とパツタリ目があつた。「角谷さん」と云つて近づいてきた。常に行つた食堂の娘さんだ。その顔全体が空襲の惨憺さと恐怖を語つてゐる。額には火傷を受け二寸ぐらい赤くただれてゐる。弟と二人で手に釜を下げその中に僅かばかりの食器が入つてゐる。自分には慰めの言葉もよく出ない。只小母さんの安否を尋ふ位である。只知つた顔に会つたと云ふだけでも、幾分心強く

なつたと云ふ風に見える。而しその顔にはやつぱり娘々した、羞らひを含んだ可愛いつぶらな瞳は元のまゝである。その瞳の一瞥で我々の学生生活を思い出すには十分であつた。

学校の前途来ると、本館が周囲の焼け跡の中に厳然と構へ煙筒が空に屹立して居るのが先づ目に入る。然しよく見ると本館とても無事に残つたのではなく、側面の表面は焼かれ黒く壁は落ち、ガラスは破壊してゐる。附属病院のバラックはもう完全に姿を消してゐる。我々の苦しくも楽しかつた臨床生活を思い出さすものとは、焼けこげた治療台の列と、白々とつまれた石膏の山のみである。私にはつらい嫌な思ひをする臨床生活に耐へかねて、自分をのろひ、果ては学校のをのろひ、焼けてくれたらとも思はない事はなかつたが、今その焼け跡に立つて見るとき、苦しんだ事、悩んだ事、それ自身が何か得がたい、有難い経験だつたと思はれてならない。そしてバラックの病院を惜しむ気持が段々強まるのである。炭のかはりに使うのであらう、二三人の女が焼けこげの木をバケツにひろい集めてゐる。落穂ひろひを思ひ出さすが、然し何と云ふ違がある事だらう。

その内に、硫黄島の死にも狂いの抗争もはかなく、国民の耳にはもう何等の感動をも起こさない「玉砕」が新聞に出た。「玉砕」、何と云ふぞらぐしい虚飾な言葉であらう。何千の何万の人々が限りを尽して死滅した時、このよそ／＼しい言葉がその結果を示すのだ。これらの何の感じも起こさせないかさ／＼な

言葉が、スローガンが、我等の眼を、耳をどれだけ無茶苦茶に通ら過ぎた事でだらう。

続めて沖縄上陸の報道がもたらされる。それと共に日本全土の爆撃は更にひどくなつて行く。今は一億玉砕さへとなへられて来た。

我々の新学期はこの様な状態の下で始められた。先づ課せられたのは、強制疎開の家居倒壊作業であつた。

春の日は愈くたく、シャツ一枚でやつてゐても汗がでる。上野の山はすぐ目の先でもう青々と春めいて来てゐるが、誰一人そんな事に気付く者さへない。無氣力に惰性でもつて、ノコをひく、壁をたゝき壊す。土台の柱が切られると軒にロープをかけて、我々はそれを曳いて倒す。とゴウ然と音を立て、又悲鳴を上げて家が曳き倒される。その時に人々の顔に多少の生き／＼しさが現れるのだ。はかない自棄的の喜びとも云へない感じが小波を立てるのだ。我身を己といためつける事による、やけ糞な笑ひ、全くそれと同じだ。こんな事しても無駄な事はしれきつてゐる。と云ふ顔付で、それでも器械的に手を動かし、体を動かしてゐる。この様な作業が三四日続いた。

伯父は既に田舎に疎開したので、新しい下宿から学校へ通つた。中央線のN駅から歩いて十分位の所で、粗末な家々の一つである。少し後の方には小川とも溝ともつかぬ流があつて、その向ふは強制疎開で倒壊され柱板瓦等が雑然と堆積して、それは近辺の家々のたき付の鉾山ともなつてゐる。私のあてがはれ

た部屋には、西と南はガタ／＼のガラス戸なつてゐて、一日中日と風とは実によく入る。階段を上つて押入れの様な開きふすまをあけて入ると、荒れてきつだらけの壁に日本郵船の大きな広告がピンでとめてあり、一隅はさけてだらりと下つてゐる。南洋の光景とをぼしく、原色の生まなましい草花の海岸からコバルト色の海が望まれ、そこに汽船が描いてある。その鮮やかな毒々しい色合が益々部屋の粗雑さをかき立てる。伯父の所からもつて来た脚の動く坐り机を一隅にすゑ、十冊に足りない医書や他の雑書を畳に直かにつむ。そしてもうがつかりして坐り込んでしまつた。こんな調子で果して東京生活を続けて行けるかどうか、何だか暗い気分にはきづられ行くまゝに茫然として坐りつくす。周囲は大部くらくなつて来た。ガラス戸は薄桃色にぼんやり明るい。飯に呼び声に正気にかへつて立ち上がった。

四畳位の茶の間に食卓を置めて皆が坐つてゐる。新米のかたくるしきでその間に割り込んだ。家族はおばさんとその娘の二人、同宿の人は、一人はある官庁にかよつてゐる人と陸軍の工廠に行つてゐる下士官とである。もう一人今月出産すると云ふ女の三人である。一碗の雑炊をかき込む食卓は都民の食事の苦しき、はじめさを如実に語つてゐる。これで果してやつて行けるだらうかと、うたがひと心細きに雑炊をかき込んで部屋に帰つた。参考書等はどうてい見る気になれず煙草を取出して火をつける。煙がゆるくあたゝか味をたゞよはした。どうやら気分も落ちついて来た。食事の後始末の音が、そここゝでする。下

手な歌声も聞えて来る。所在がなさに蕪村句集を出して、あちこちばら／＼と眼を通す。豆を煎る香ばしいにほひとガラ／＼とかきまぜる音がする。

不安ながらも講義は始められていつた。自分は外界の荒涼さ、食生活のとばしき、それにつれて起こる望郷の情などを忘れ去るために、勉強に没頭しようともがいた。日々の講義も興味がつて来た。知るよろこび、それも再びかへつて来た。

而しその状態を伸び／＼と放置しておいては呉れなかつた。爆撃は益々真体の恐しさ、悲惨さを露はにして来た。三月以来夜間焼夷弾攻撃による大爆撃に移り、それが着々功を奏して、大都市は一爆撃毎に灰に化し、瓦礫に化して行つた。

その日は、ノート整理も終り、理解した知識で満足した気持ちで寝についた。月の光が窓を明るくし、葉をつけ始めた枝さへはつきりうつしてゐた。二、三〇分後にはもう眠り込んでしまつてゐたらしかつた。地上の苦はもうと／＼かない、夢の高所に漂ひつゝ、無限の時が過ぎて行く。

突如サイレンが耳朶をふるはす。深淵から引上げられた魚の如くに一瞬キョトンと眼を開けたまゝ、だつたが、すぐ現実に返り蒲団をはねのけた。ブザーがけた、ましく情報をつげるのだから言葉は分らない。「来るぞ」と云ふ予感がフーと全身を通り抜ける。続いて空襲警報がうなり出す、続いては絶え、絶えては起る、あのサイレンの気味悪さは、頭を妙に混乱さす。同時に、遠くではあるが、もう爆弾の破裂音が夜を破つた。シャツをとる、

ズボンをはく、服をきる、爆音対空砲火が気をあせらせ、手がキョト／＼する。人の声、戸をガラ／＼開ける音、防火用水に水をくむ音、すべてが「早く／＼」と叫ぶ。ガラス戸をガツと開けて空を見る。

一機二機、ぐん／＼都心の方に進んで行く。すでに火の手は地平線染めてゐる。階下に落ち込むやうに飛び降りて手早く靴ひもをしめて外に出た。半天は赤々ともえ立つてゐる。一機づゝ、絶えまなく飛び過ぎて行く。頭上を越えてカーッと探照灯が走つた。ぐる／＼と頭をめぐらすと、思ひもかけぬ大きさに一機、真正面にこの方向に突込んで来る。危い、と叫んだ瞬間、ガーと頭上を通りすぎ、同時に焼夷弾を投下した。バーンと途中で破裂して、ザーッと物凄いい音と光を伴つて落下して来る。ハッと身を伏せた時は、森一つ向ふで、一面光が飛び上がり、乱れ狂つてゐる。一瞬ためらふ事なく、家をなめつくして燃え上がった。木のはじき鳴る声が実に近く聞える。

今は市内全部が燃え上がり、残つてゐるのは、自分の立つてゐる所だけみたいな気がする。炎に腹を赤く照らされて縦横に敵機が飛びゆく。探照灯の光さへ必要ない様だ。周囲はいつの間にか煙臭くなり、實際煙で空もぼんやりして来た。その中を高射機関砲の火がふく、ツ、ツと赤提灯の様な光がつかれた火の玉の様に空に上がつて行く。地面は断へざる振動でゴウ／＼うなつてゐる。黒影が通り過ぎると、その周囲一面に星くづがまかれた如くに高射砲弾がさく裂する。

気がついて見ると大分静かになつてきたやうだ。時計を明かりにすかして見ると、二時を過ぎてゐる。地上一面はほのほにつゝまれて、夜空をこがしてゐる。だが、妙に静かだ。無声映画を見て居る様である。而しそれとてもやはり錯覚にすぎない、心が静まるにつれ、頬には熱気も感ぜられ、木のはじく音、人の騒ぎ声、それらがうづまく様になつてゐるのが聞える。涙がとめどなく流れ、眼がちかちかと痛む。

波の様に劇しさと静かさが二三回繰り返へされたが、最後の一機も退去したのであらう、もう爆音もかすかになつていった。小さな溝は焰をうつして、きらきらと波をつくつて流れる。サイレンが一声遠くで鳴り出すや、次々に近くなのが、空襲警報解除の響を伝へる。ホッと今までの緊張がゆるめられ、今度ものがれた、といふ安心が先づ感ぜられる。小さな葉をつけた梧桐の枝が赤い夜空にかつきりと影をつくつてゐるのが妙にはつきりと眼にうつるのであつた。空腹と疲れでぐつたりとなつて部屋に上がり込んで、そのまゝ蒲団をかぶりこんでしまつた。窓はまだ赤々として明るんでゐる。すぐに眠りはしたものの、これだけの刺激を受けた後であつて見れば、そう／＼深い平安なねむりには到底入るものではなかつた。眼こそ覚ますことはなかつたが、水が浅瀬を行く様な、浅い、ざわざわとした夢の連続だつた。眼がまばゆく感じた時は、もう陽は窓一杯を照らしてゐた。無理に眼を開けようとするが、瞼が膠ではり合はせたまに中々開かない。眼だけはまだあくまで眠る事を主張する。

うと／＼と又夢の境にはまり込んで行く。やうやうはつきりと眼覚めた時は日は大分上つてゐた。身体は起き出すのもオックウな程凝つてゐる。昨夜のまゝの服装ゆえ、巻脚絆もつけたまゝだ。ぼんやり重い頭を無理に起して、床から手を伸ばしてガラス戸を開ける。春の気は昨日に変わらなうらうらとたゞよひ、向ひの屋根では雀が二羽小刻みに飛びはねながら、ふざけてゐる。昨夜と今朝とのつながりがありあまりに突飛だ。こんな突飛な面の組み合わせは今後常にぶつかつて、むしろそれが常態と感ぜられるやうになつた。

その日は、学校の方の安否を確かめたいのと、被害の様子も見たく遅い朝食をとつて出かけた。弁当だけを袋に入れて防空頭巾と共に肩に下げて出る。学生が行く。会社員が行く。女学生が行く。それらが一様に駅をさして急ぐ。

改

教室に於いても、その頃には蔽ひかくせない厭戦気分があつた。級の中でも口の効く二三人の連中が集まれば、大きな圧力の下にぢり／＼確実にせまつて来る敵の勢に就いてあざける様に我軍の劣勢を説いた。そして、それによつて我れと自棄的な満足に浸ることが度重なつて行つた。私の若さは、それに抗しやうとしながらも、やつぱりその気分の中に沈んで行くのだつた。

市内はあらまし焼滅し、毎日の省線での通学時に、我々の目

にふれるものも殆ど、元の形を保つてゐるものとはなかつた。どの駅も屋根は破れホームは斑らに焼夷弾の焼け跡がしみついてゐる。今迄通る毎に目を楽しましてゐた千駄ヶ谷から四谷あたりの手のよく入った、人工的ではあるが気持ちのよい並木や林等の線が、哀れにも焼けちぎれもう再び生を活きる様にも思はれなくなつた。その内にボツ／＼壕舎が目に入る様になつて来た。それらは焼け落ちたトタン等でやうやく組立てたものが多く、岡や崖にある横穴は大抵人々が住むらしかつた。

車内は近頃汚れが目立つて来た。網棚はくたびれ切つた風に、満足なものは殆どなく、破れちぎれてぶら下がつてゐる。ギツシリつまつた人々には、人間の表情は失はれ硬く凍え、各人の特徴はあるかないか判らぬ位に押しつけられ、総てが同一の顔付に強いられてゐる。而しそれでも、さすがに娘達は、若さがその硬さからまぬがれさして、あたりに人間的な小波を立てるのだつた。それに反し、若い男は、誰も黄色っぽく枯れ、少しの活き／＼しさもない。第一線へ強壯な青年達が総て出払た後とはいへ、やつぱり四圍の重圧感があり／＼とそれらの顔から見てとれるのである。勿論自分もその一人であつた。鏡は見ずともそれらの顔の反射で自分の顔があまりに明らかに判るので、更に気持ちをめ入り込ませてしまふのである。

我々は以前はかう考へてゐた。戦争、それは決して悪ばかりではない、それが苛酷になればなる程、我々の贅肉はとれ、二義三義の衣はぬぎ捨てられ、一義的なもの、みが光をはなつ様

になるだらう、そうしてその時こそ、我々の思想宗教が確乎として把握し得るだらうと。

ところが、戦争がまぎ／＼とした実在として目前に姿を現した今に於て、自分はどうかであらうか。「蛇の口から光を奪」はうと欲した我の現在の状態はどうであらうか。あゝ、自分の弱さ無能力、それが如何に目を蔽ふとしても、動かし難く明らかに、つきつけられたのだ。

死を瞬間々々にのがれつ、何らそこに真摯なる探求もなされず、生命を高く揚げようとする意欲もなく、むしろ無思想に、あてなしに流される儘に一日一日を消して行く状態……

ところが、後で新聞を見ると現在学生の傾向として、形而上の問題に対しては無関心であり、實際すぐに役立つ知識技術を求める傾向ありとし、それを以て寧ろ良き傾向であると云ふことを讀んだ時、自分一個の状態とのみ思つてゐた事が、実は一般青年の傾向とも合致してゐることを見つけたのだつた。批判的な目を押へられ押へられて育つて来た現在、学生にはどうしてもこういう道へ行くより外はなかつたとも思はれるが、自分のこういう状態を意識したとき、始めてカロツサが前大戦時、硝煙の中からつみとつて来たルーマニア日記の価値が如何に尊いものであるか、又それを奪ひとつて来たカロツサ自身が急に大きく、高く、伸び、自分等のうか／＼ふ事も出来ない様に思はれて来た。

私の心は真つ暗闇だつた。光の片影すら認められなかつた。

暗黒に溺れて、もう光を求めようとする気さへ失つてゐた。それは、また、そのまゝ、国の状態でもあつた。八方ふさがりのもだえであつた。自殺的な玉碎の声のみが溢れて行つた。武器なき兵士達がふえて行つた。

「壊滅（空襲の日々）」の解題

角 谷 有 一

今号では、父の遺品の中から見つかった東京大空襲の経験を書き綴つた文章を掲載しました。

昭和二十一年一月四日と記された六百字詰め原稿用紙二十五枚を、粗悪な油紙で綴じた原稿で、表紙に墨で「壊滅（空襲の日々）」と題されていました。

父の没後、昭和十五年一月から昭和二十五年までの十年間（途中欠落しているところもありますが）の十冊の日記帳とデスクトレイに入つた二百枚ほどの原稿が残されていました。これらの原稿のほとんどは日記の記述をもとにしたもので、「壊滅」もその中にありました。

生前、父からは戦時中のことをほとんど聞いたことがなかったので、残された日記をもとに当時の父について簡単に紹介しておきます。

父、角谷次吉は、大正十一年十一月に石川県小松の海産物を扱う商店「すみげん」の次男として生まれ、旧制小松中学を卒

業後、第四高等学校文科を受験するも失敗。その後、志望を医療にかかわる仕事に変更して、昭和十六年に官立東京高等歯科医学学校（後の東京医科歯科大学、現在の東京科学大学）の歯学部十三期生として入学しました。そして、同十九年九月に卒業し、その後、地元小松で徴兵検査を受け、入隊することになった。たようですが、肺の疾患のため即日帰郷となり、しばらく小松の実家で養生の後、昭和十九年十二月に上京して、二十年四月に新たに開学された同学医学部に入学しました。

ここに掲載した文章は、その間、再び上京後の昭和十九年十二月から翌二十年六月までの日記の記述をもとに、翌二十一年、医学部在学中に、一つの作品として書きまとめた文章だと思われまゝ。手記執筆当時の父は満年齢で二十三歳の文学好きの医学生でした。空襲の記憶がまだ生々しく、十分に整理されないまま綴られた文章であるため、読みにくい箇所もあるかもしれません。また、原稿には欠落している部分や誤字、表現の不備も見られますが、今回は残された原稿をできるだけそのままの形で活字化しました。

原稿は旧漢字、旧仮名遣いで書かれていますが、旧漢字については適宜新漢字に改め、仮名遣いについては旧仮名遣いのまま活字化しました。

世界各地で武力紛争が続く、戦争の影が再び私たちの暮らしに近づいてきているように感じられる今、父が若い医学生として体験した八十年前の空襲の日々を記したこの手記には、なお

読むべき意味があると私は考えます。一人でも多くの方に、この手記を読んでいただければ幸いです。

音羽診療所の事

遠藤雅樹

学校を出てからしばらく京都山科に住んだことがある。偶然であるが角谷有一の実家近くで、その実家は音羽診療所を構えていた。ご挨拶に伺ったのが初対面で、夏が終わるころには東京に引越したので、その間何度かお目にかかる機会があった。山科は東山と音羽山の間に広がる地域で東海道新幹線が中央を走っている。室町時代には本願寺があったところで、遺構である城郭のような古い堡塁が残っているそうだ。

京阪電鉄京津線は三条駅から東山、蹴上、九条山、日ノ岡、御陵、山科、四宮、追分、大谷、上柴町を経て浜天津にいたる路線で、今は地下鉄が開業して三条・山科間は廃止になった。もう半世紀も前の話なので記憶もおぼろになってきたが、京津線の廃止された区間は東山の山腹の勾配を走る風情のある路線であった。

住んでいたのは四宮というところで、駅を降りて北に向かう

道を歩いていくと琵琶湖疎水が流れている。その疎水に沿って細い道が山科まで続いていた。山科に移り住んですぐに、疎水にそって四宮から山科まで歩いたことがある。疎水の入り口こそ灯りはあるが、しばらく歩くと自分の足もとすら見えない真暗闇で、木々を通して街の明かりがおぼろにみえるだけで、それを頼りに歩いていく。左手は水量のある琵琶湖疎水が音もなく黒い背中を見せながら流れている。その黒い流れに桜の白い花びらがあとからあとから惜しげもなく降り落ちていた。

ある日、部屋の台所でビールを飲みながら酢だこを作っていた。包丁が指に触れる感覚があり、タコの白い肌がみるみる血に染まった。しばらく指の付け根を押さえていたが、鮮血が止まらない。血は後から後からあふれてくる。それで音羽診療所に駆け込んだ。

「傷は大したことではないが、アルコールを飲んでいたせいで大量に出血したでしょう。」大きな木製の机の前に座った角谷先生は、丁寧に指先を消毒し包帯を巻いてくれた。夜の八時頃だっただろうか。角谷先生は、夕食を済ませ、診察室の机の上にNHKドイツ語講座のテキストを開いて、シュトルムの小説の一節を読んでいらつしやつた。

若いころから藤村を尊敬し、晩年はモンテーニュ「エッセー」から医学関連の文章を引き写していたという。夜の診察室でシュトルムをドイツ語で読む医師など今ではおそらく皆無であろう。角谷先生は、手記を読んでもわかるが、減んで久しい旧制中学・

高校の教養主義の厚みを身につけ、市井の知識人として昭和の時代を生きたひとであった。そんな人が我々の父母の世代には、いくたりも身近にいたような気がするのである。

エチユード（二）

遠藤雅樹

街宣に群れ集い来て叫ぶひと右はネトウヨとなに思いつむ

ストッキングデーパーインパクト女達考える葦トランプの馬□

海が割れなくても沖縄の道も日本の道もいつもひそかに向こうへ続く

湯けむりの向こうにももの動く影野^の天風呂^{てん}にひと熊もいる今

空山に紅葉吹き散る誰がためにひかりをまとい背に降り乱る

河床に紅葉散り敷く夕まぐれ見る人なしに秋ゆきぬべき

ふるさとの水ぬるみゆく水辺^{みずのへ}にミモザはさかり山吹も咲く

赤巻紙青巻紙黄巻紙いろは匂えど花いちもんめ

冬空にシリウスオリオンペルセウスひとときわ赤くマルス輝く

凍空のシリウスオリオンペルセウス赤錆ぶマルスにわが日々を恥づ

雪の日のシエルブルーの訣別の赤黄の傘の昔日のごと

雨の日のオランダ坂の訣別の赤黄の傘の昔日のごと

雪の日のマンハッタンの訣別の赤黄の傘の昔日のごと

夕陽せきようの坂を子供が上つていく短い影を引きずりながら

間が悪いこと多くて過ぎた日々逃げた魚は大きい小さいか

夢の跡とぎ時空を隔てて帰る日に面影を探してはいけない

くりかえし寄せる波の音鈍く寄せる波に月波水のよう

点燭の輪につらなれる乙女らに無尽を尽くすひかりあらまし

聞く耳をもたぬ我なれば耳順過ぎ従心の夏をよろめき歩む

とうがらしの湯呑と 「ボードレールの肖像」

遠藤雅樹

(一)

昨年の十月、ちょうど大阪万博があと一週間で閉幕という頃であったと思う。香月泰男の「シベリア」シリーズが見たくなくて山口県立美術館と三隅町にある香月泰男美術館を初めて訪ねた。一泊二日の強行軍になったが、十時前に新山口駅につき、レンタカーを借りて山口県立美術館に行き香月泰男の常設展示室をみた。シニアなら県外者でも無料です、という案内があった。香月泰男の「シベリア」シリーズを、全作品ではないが、常設で展示してある部屋があり、平日の午前だったので見学は私ひとりであった。

香月泰男の「シベリア」シリーズは過去二回、名古屋と東京ステーションギャラリーで見ているが、今回のように心ゆくまでディテールとマチエールを鑑賞できたことはなかった。画材が厚く塗り積もった(変な表現だが)マチエールはほとんど彫

刻のようだ。「雪山」という作品がある。雪に覆われたシベリアの山と山に挟まれて雪をかぶった松林がどこまでも続いている風景を描いたものだが、雪をかぶった松林の暗さが、その奥のほうに吸い込まれていくように立体的に表現されているのであるが、何度見てもどうやって描いたのか見当がつかなかった。

萩市は山口県立美術館から車で一時間ほどの距離にあり、山並みを抜けると日本海が見えてくる。その日は萩市に泊まる予定で、夕飯にはまだ時間があり、それに急に思い立った旅なので、旅程もない。骨董店をネットで検索して車を走らせた。萩博物館前から東に抜がる一帯が城下町跡にあたり、なまこ壁がつづく菊屋横丁を歩くと高杉晋作生家跡や木戸孝允旧宅などがある。そういえばこのあたりは明治維新の立役者が活躍した場所で、松下山村塾もこのあたりだったと気がついた。事程左様にその時はまったく別の事に気を取られていた。絵付けの陶器、これである。

今回の山口行は、山口県立美術館と香月泰男美術館を訪ねることが第一の目的なのは間違いないが、萩に来れば香月泰男が絵付けをした陶器をおいている骨董屋があるかもしれない。萩市の観光にはあまり興味がわかなかった次第である。

萩博物館に背を向けて道を真直ぐに行くと萩焼を置いている店舗が数軒あり、骨董店も一軒あった。骨董店といっても萩焼を中心とした品揃えで聞いてみると香月のものはなく、それに

萩市には香月のものを扱うような店はないのではないかという返事であった。外国の観光客がもの珍しげに品定めをしていたが、焼き物の趣味はないので、店を出るともと来た道をふらふら歩き始めた。少し歩いた道の反対側に店舗には見えないが、中に陶器や雑貨がたくさん置いてるところがあった。店のなかには薄暗いが、内に三人ひとがいて話をしている。戸を開けて並んでいるものを見てもいいかと聞くと、構わないという返事だった。年恰好六十代の人のよさそうな女性が、ここは道を挟んだ反対側の萩焼の店の倉庫なのだと教えてくれる。年代物も並んでいるようなので、試しに、香月泰男が絵付けした焼き物を探しているのだが、あるかと尋ねると、「ある」という返事が返ってきた。しばらく店の奥に引っ込んで、いくつか箱を持ち出してきた。湯呑がふたつ、皿が一枚、そのほか香月泰男の絵もあるという。奥の部屋に案内してもらうと、香月らしい色調の古びた額がかけてある。部屋に明かりはついていなかったが、器物や絵が入っているらしい箱が乱雑に置かれていた。

奥から出てきて見せてくれたのは「とうがらし」と「母と子」を絵付けした湯呑み茶碗と、「魚」の大絵皿である。リトグラフもどこかにあったはずと、店のなかを探してくれる。このあたりから正気を失っていたのだろう。この機会を逃すともう手に入らない、と思ったが最後、結果は火を見るより明らかである。絵皿と絵画の方は手が出る値段では無かったが、「湯呑」と「リトグラフ」なら無理をすれば何とかなる、このあいだヤフオク

に出ていた湯呑も高値で落札されていたではなかったか。リトグラフと称するものは画題が立葵で、画集で見た記憶があるような気がした。店のなかには薄暗かった。明るいところで見ればまた考えを変えていたかもしれないが、そのときは手に入れた気持ちに先に立ち、「とうがらし」の湯呑と「立葵」をもらうことにした。

数日後、宅急便が届いた。湯呑は立派であり箱書きもあるが少し新しいように見える。リトグラフの方はといえば、どうして店で見たときに気が付かなかったのか不思議な気がするが、表面がざらざらで版画とは思えない。額縁の裏をあけてみると美術印刷とある。そうすると湯呑の方も不安になった。

たまにでかける古本屋のとなりが古美術を扱う店で、入ったことはなかったが、掛け軸や絵画が専門の古美術店であることは知っていたので鑑定を頼むことにした。店に入ってから告げると主人が出てきて、まあ座れという。室内を見回すと壁にかけてある絵画は現代美術のものが多く、一番奥の壁に香月の作品らしきものも見える。しばらく箱書きや湯呑を見ていたが、

「本物でしようね」という。

「いくらくらいするのですか」

「二、三万というところでしょうか、ときどき出ます」

さすがに買値は言いかねた。あの狸婆の奴、今度会ったらタ

ダではずまさんと意気込んでも、別に売りつけられたわけではないので、ただただおのれの不明を恥じるばかり。これも修行の第一歩と、香月泰男のリトグラフの入手の仕方など教えを乞うて帰ってきた。

小林秀雄が骨董についていくつかエッセイを書いている。骨董に憑かれた変人たちを活写した「真贋」もそのひとつで、ニセモノをつかまされた時のころえが諄々と描かれている。なかでも小林秀雄が彫三島を手に入れたときのいきさつは庄巻で、私のとうがらしの湯呑とは雲泥の差があるが、冷静さを失うことにかけては同じような経験であろう。その後とうがらしの湯呑茶碗は毎朝食卓にあり、それでお茶を飲んだり牛乳を飲んだり重宝している。

テレビ番組「開運！なんでも鑑定団」を見てみると、オークションで手に入れたという「家宝」が時々出てくる。安価で手に入れたものには思いがけず高値がついたり、著名人のものが贋作や印刷物だったりするのは御愛嬌で、思い入れの強いものほど、正反対の結果に終わるようだ。「贋作」と鑑定されると、確かに偽物らしく見えてくるのは不思議である。

オークションの出品者の品目を見ると、いわゆるストア出品者で絵画専門、骨董専門、古書専門らしい品揃えも多いが、なかには家具、家電、自転車、健康器具、衣料、骨董、食器類、

雑誌といった家にそろっている品物をみんな売っているんじゃないかと思われるようなショッパもある。古美術店の主人の話では、家屋まるごと整理を任された業者が、回収したものに適当な値段をつけてオークションを利用して売りさばっているケースがあるという話で、その整理業者を目当てに、目ぼしい書画骨董類を買い漁りにくるオークション業者もあるそうだ。

私もヤフーオークションやメルカリで時々物を買う。古本が大半を占めるが、ときどき版画やボスターの類を手に入れて部屋に飾って楽しんでいる。入札額を二万円までと決めているので、高価なものには手が出ないが、それでもときどき「家宝」とおぼしきものが手に入る。長さが一メートル以上、男の顔のドローイングが全体の七割以上を占める「ベン・シャーン展」のボスターもそのひとつである。

(二)

さて、最近ヤフオクをたまたま見ていたら、「ボードレールの肖像」という銅版画が目についた。画はボードレール詩集の口絵によく使われるので知っていたが、それがマネの作品とは初耳だった。パソコンの画面でみても、黒の線がくつきりとしてなかなかよさそうに、つまり出自はわからないが、オフセット印刷のようには見えなかった。入札価格はたしか千円スタートだったのでエントリーしたが、最終的に二万二千円まで吊り上

がってしまった。どうしても欲しかったので、二万円という一線には目をつぶった。

手に入れた銅版画は三〇×二八センチの金メッキをした額に入っている。その真ん中に八センチ角の小さな肖像が印刷されている。肖像の部分はプレス機で刷ったときに原版の四角いエッジが紙に強く押し付けられてできる圧痕が確認できる。版画にはマネのサインが刷り込まれ、下部には「Peint et Gravé par Manet 1865」「Imp. A. Salmon」と印刷されている。額縁マントには、左側に「Eau-forte originale Portrait de Baudelaire」、右側に「Manet」(マネ)と手書き文字が入っている。

手に入れたマネの「ボードレールの肖像」であるが、手に取ってみると、これがなかなかいいのである。私が手に入れた銅版画はそもそもなものであるのか。本来ならボードレール詩集やマネの画集を紐解いて「ボードレールの肖像」の解説を読むくらいしか素人には調べる方法はない。しかし当節は、グーグル(Google)先生だけでなく、チャットジーピーティー(CHATGPT)探偵やジェミニ(GEMINI)警部という強い味方が助けてくれる。さっそく調査に取りかかった。

まず「ボードレールの肖像」の拡大写真を五〜六枚スマホで撮影し、オークション出品者の説明をそのままコピーしてCHATGPTにはりつけた。そして、「これは何だろう?」と質問してみる。出品者の商品説明には「真作・銅版画・エドゥアール・

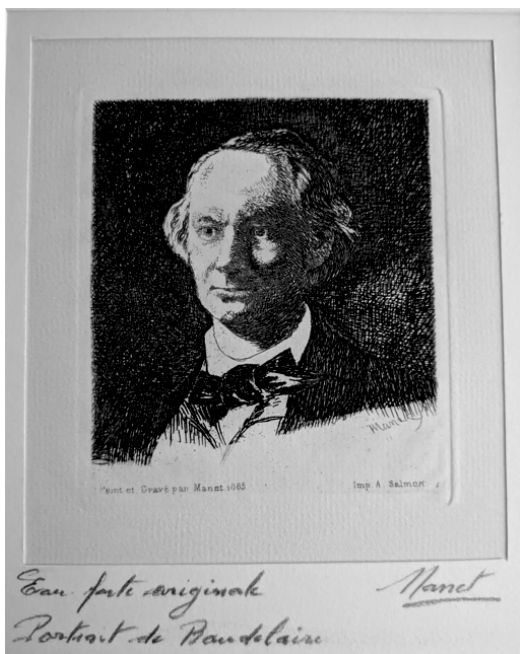
マネの詩人・シャルル・ボードレールの肖像・額付絵画・ガラス付・箱なし・額にキズ・汚れ有・本紙ヤケ有り」とあり、あとは額寸法と絵寸法が表記されているだけである。CHATGPT探偵はたったこれだけの証拠から驚くべき調査結果をもたらしてくれる。

以下が写真数枚と簡単な商品説明から下したCHATGPT探偵の最初の判定である。

この銅版画「ボードレールの肖像」はシャルル・アスリノーというボードレールの親友が書いた最初の本格的伝記「シャルル・ボードレール その生涯と作品」(一八六九年)の口絵としてマネが一八六五年に制作したもので、もう一枚マネが制作した「帽子をかぶった横顔」という作品と一緒に伝記の口絵として収録されたものです。私(CHATGPT)の現時点での評価は、「本物の十九世紀刷りである可能性はあるが、「マネの直筆サイン入りオリジナル銅版画」としては考えにくい」です。ただし、「十九世紀の版から刷られたアンティーク銅版画」としては十分に価値がある可能性があります。良い点 ①版そのものは本物らしい、画面下にはPeint et Gravé par Manet 1865とあります。つまり「一八六五年にマネ自身が描き、銅版も自ら刻んだ」という意味です。これは実際に存在する作品です。②印刷所表示は、右下Imp. A. Salmon、これはAuguste Salmon印刷所で、十九世紀パリの有名な版画印刷所です。これも時代的

に一致しています。③線の状態は、拡大写真を見ると銅版特有の細いビュラン線、黒の締まり、インクの乗りが見えます。写真だけでは断定できませんが、レーザーコピーには見えません。一番気になる点は、紙下部に《Eau-forte originale Portrait de Baudelaire》、さらに《Manet》というサイン風文字があります。この文字にかなり違和感があります。理由はマネ本人がこういう作品タイトル「Portrait de Baudelaire」を書いて販売した例を私は知りません。普通ならマネのエッチングは余白だけです。タイトルを手書きで入れる文化ではありません。むしろ「Manet」の署名も本人筆跡というより印刷あるいはファクシミリ署名に見えます。サインは直筆か？画像ではかなり難しいですが、私は直筆ではない可能性が高いと思います。理由は、線幅が一定、インクの濃さが一定、紙への食い込みが弱い、です。作品の年代ですが、可能性は、①一八六五年初版、②十九世紀後半再版、③二十世紀前半限定版、④近年復刻、この四つです。私は写真だけで判定すると、②か③くらいの印象です。紙を見ると紙焼けがあります。しかしこれは古い紙でも人工でも起こります。紙だけでは年代判定できません。サイズは文献に載るサイズとはば一致しています。市場価格は、もし一八六五年頃の刷りなら十〜三十万円以上もあります。十九世紀後半刷りなら三〜十万円程度。二十世紀限定版なら一〜五万円程度。近年復刻は数千円〜一万円。今回の写真だけからの私の予想では十九世紀後半刷りくらいの可能性が最も高い印象です。

どうだろう。ジャンルは違うが、「開運！なんでも鑑定団」の中島誠之助先生もびつくりの判定ではないだろうか。そのあと、CHATGPT 探偵の調査結果を GEMINI 警部に検証させ、その結果を CHATGPT 探偵にフィードバックするなどして、最終的に得られた結果はつぎのようにまとめることができる。いろいろな質問を重ねたが、調査にかかった時間は一時間に満たない。



手に入れたマネ「ボードレールの肖像」

この「ボードレールの肖像」は、一八六九年版の「ボードレール伝」の口絵の可能性はなさそうだ。口絵なら本の大きさに裁断されたはずで、だからこれは一八六九年の初版本から切り離した口絵ではなく、一八九四年頃または一九〇五年頃の美術愛好家向けに頒布された後刷りである可能性が高い。そうすると、マネの没年は一八八三年であることから、額縁マットにある手書きのタイトルや作者名は、マネの直筆ではなく後年の出版時に加えられたものと推定できる。マネの銅版画「ボードレールの肖像」の原版は一九二一年に仏国会図書館に寄贈されている。それまでの版画は「Peint et Gravé par Manet 1865」や「Imp. A. Salmon」が同時に印刷されるので、マネの原版をもとに印刷されたことは確かである。口絵が印刷された後の後刷りも記録に残っている。一八九四年にパリの出版社ストロランが三十部、一九〇五年に同じくストロランが百部、一九二一年にル・ガレックが百〇百五十部を刷っている。GEMINI警部は「多くても世界に数百枚しかないエディションで、マネ自身が直接手を入れたオリジナル原版の凹凸が、後年になって職人の手により忠実に紙に再現されたもの」と断言している。CHATGPT探偵はGEMINI警部の断定にいろいろいちゃもんをつけていたが、最終的に「一九〇五年にパリの出版社ストロランがマネのオリジナル銅版画三十点を収録した豪華版画集を刊行したが、『ボードレールの肖像』はその中の一枚であろう」と結論付けてくれた。

*手持ちの本でいえば、ちくま文庫「ボードレール全詩集（二）」のカバーに使われているのがその「帽子をかぶった横顔」である。

中島敦「古譚」論 その二

「文字禍」を読む

角 谷 有 一

はじめに 物語の背景となる時代や場所について

本稿では、「狐憑」、「木乃伊」、「山月記」、「文字禍」の四編が、「古譚」としてまとめて収録された中島敦の第一創作集『光と風と夢』の中から、「古譚」の最後に置かれた「文字禍」を取り上げて、この作品が訴えかけているものを探りながら新たな視点から読み返してみることにする。

作品は、次の一文から始まる。

文字の霊などといふものが、一体、あるものか、どうか。

この冒頭の一文は、物語の中のアッシリアの人々の、その中のアシュル・パニ・アバル大王の疑問であり、大王にその研究を命じられたナブ・アヘ・エリバ博士に課された問いであるとともに、「語り手」が自身に向けて、さらには、読者に投げかけている問いでもある。この一文が現代の読者である私たちにも

向けられた問いであることに着目して、作品を読み終えたときに、この問いが読者の中でどのように変容するのか。それを、作品世界を丁寧に戻しながら見ていきたい。

さて、「語り手」は、ここで、「文字の霊」が本当に存在するのかどうかを明らかにすることなく、読者を、いきなり紀元前七世紀のアッシリアの宮廷という物語世界に誘い込んでいく。

一 物語の背景となる時代と場所について

冒頭の一文の後、いよいよ物語世界に入っていくのだが、その前に作品成立の経緯と作品世界の舞台となった時代や場所、歴史的背景などについて簡単に説明しておく。

中島敦は、「古譚」の四作品では、古代の別の時代、別の場所を舞台としてそれぞれの作品世界を作り上げている。また、どの作品においても、完成させるまでに時間をかけて物語の時代背景や典拠となる話について調べ、資料を収集して読み込んでいるのである。「文字禍」の作品化に際しても、十冊以上の英文の書籍名をメモに残し、それらの中から三冊乃至は四冊に書かれている出来事を典拠としてこの作品の舞台を作り上げている。

「文字禍」には、古代アッシリアや古代オリエント史への中島敦自身の関心が背景にあり、それゆえ、当時入手可能であった研究書や神話に関する資料を参考にしたのだと思われる。そして、それらの資料をもとに下書きを作り、さらに、「文字」というタイトルをつけた草稿も残している。この下書きや草稿との

比較から「文字禍」の生成過程や草稿との緻密な比較研究がなされて、作品がどのように構想されて、どんな資料をもとに書き改められて現在の完成形に至ったかが、多くの研究者によって詳しく論じられてきた。しかし、ここでは、「文字禍」として発表された作品を読み解くことを主眼とするので、それぞれの論文等については触れないこととする。

さて、このようにして書き上げられた「文字禍」は、アシウル・バニ・アバル大王の治世下のアッシリアを舞台として、実在の天文占星学者ナブ・アヘ・エリバ博士を主人公に据えて、史実と中島敦による虚構とを交錯させて構築された作品である。

アッシリアは、紀元前三〇〇〇年頃に起こったと言われ、その後、紀元前六〇九年に滅亡した古代オリエント世界で最初に世界帝国を築いた国家である。作品に描かれているアシウル・バニ・アバル大王の治世は、紀元前六六八年から六二七年までの四十一年間で、彼は、オリエントを統一、支配し、アッシリア帝国の全盛期を築き上げた大王だとされる。

さて、小説の舞台となっている時期については、「アシウル・バニ・アバル大王治世二十年の頃」という設定から、物語の現在とは、紀元前六四八年頃だと推定していいだろう。

また、物語を語る「語り手」については、毎夜「ひそ／＼と怪しい話し声をするといふ」図書館について説明する際に、（一）を付して以下のように語っている箇所がある。

（それは、其の後二百年にして地下に埋没し、更に後二千三百年にして偶然発掘される運命を持つものであるが）

ここから、「語り手」は、ニネヴェの図書館が発掘された十九世紀以後の時代を生きる「語り手」であることがわかる。この作品も、「狐憑」同様に、物語を語っている「語り手」は、少なくとも十九世紀以降、この小説が書かれた一九四二年に至る時代を「語りの現在」として、二五〇〇年以上時間を遡った時期を「物語の現在」として記述しているのである。この小説では、物語の展開する現在と「語り手」が記述している現在という二重の「現在」の時間の中で物語が語られているのである。

二 小説のストーリーとその構造について

まずは、物語の世界を見ていくために、そのあらすじを簡単に整理しておくところから始めたい。

《アシウル・バニ・アバル大王に命じられたナブ・アヘ・エリバ博士は、図書館の闇の中でする「怪しい話し声」の正体を探るうちに、文字を統べる「文字の霊」の存在を確信し、その働きを探っていく。そんなある日、若い歴史家のイシュディ・ナブとの対話の中で、博士は、「歴史とは粘土板のこただ」と語り、文字によって世界を把握し、支配しようとすることの危険を自覚する。しかし、その頃には博士自身も文

字以外のすべての物もバラバラに見えるという「分析病」に陥り、大王に対して、文字への盲目的崇拜の危険性を警告するが、その直後に大地震によつて粘土板の下敷きとなつて圧死してしまうのだ。表面では「文字の霊」をめぐる博士の探求とその結果の彼の死が描かれる一方、背後では、アッシリア帝国の内乱とバビロン陥落の物語が進行しており、この二つの物語が重なり合いながら小説は展開していく。》

小説の中で起こつた出来事を時系列に沿つて並べると以上のようになる。このようにあらずじを簡単に整理してみると、この小説の前半部で二つの物語が重ね合わされていることに気づく。

一つは、ニネヴェの図書館の闇の中でひそひそと聞こえる「怪しい話し声」に端を発する「文字の霊」について、大王にその解明を命じられたナブ・アヘ・エリバ博士が調査を開始して、「文字の霊」の存在と人間に対する影響を探索していくという物語であり、もう一つは、この表の物語の陰に隠れるようにして語られる、アシウル・バニ・アバル大王と、その兄のバビロン王、シムシユ・シムム・ウキンとの確執、そして、兄バビロン王の叛乱と大王によるその鎮圧とバビロンの陥落、さらに、兄王の死と大王によるその俘囚に対する処刑という一連の物語である。

第二の物語は、冒頭、博士の「文字の霊」の探求の物語の背

後に隠れるようにして、その経緯が語られている。

この二つの物語が、「歴史」をいかに記述するかという、若い歴史家イシュディ・ナブがナブ・アヘ・エリバ博士に問ひかける問題を媒介として重なり合つて展開するという点に、「文字禍」という小説の構造的特色がある。

本稿では、この二つの物語が、「文字」、「歴史」、「権力」に関する問題を通じて結びついている点に着目して作品を読み解いていく。

三 博士の研究 「文字の霊」は存在するのか ― 第一の物語

アシウル・バニ・アバル大王から、「文字の霊」という未知の精霊についての研究を命じられたナブ・アヘ・エリバ博士は、図書館の万卷の書物を読むことによつて「文字の霊」についての説を見出そうとするが、それが無駄であるとわかり、その作業を諦めて、一つの文字を眺め続けるという「凝視と静観によつて真実を見出さうとするのである。そこで、博士の身に起こつたことは次のように語られる。

一つの文字を長く見詰めてゐる中に、何時しか其の文字が解体して、意味の無い一つ一つの線の交錯としか見えなくなつて来る。単なる線の集りが、何故、さういふ音とさういふ意味とを有つことが出来るのか、どうしても解らなくなつて

来る。老儒ナブ・アヘ・エリバは、生れて初めて此の不思議な事実を発見して、驚いた。今迄七十年の間当然と思つて看過してゐたことが、決して当然でも必然でもない。彼は眼から鱗の落ちた思がした。単なるバラ／＼の線に、一定の音と一定の意味とを有たせるものは、何か？　こゝ迄思ひ到つた時、老博士は躊躇なく、文字の靈の存在を認めた。

言葉における「文字」と「音」と「意味」とは、本来は繋がりがなく、ものと言葉との関係は、言語を共有する集団の中で取り決められた恣意的な結びつきに過ぎないものである。博士は、文字を見つめ続けることによって、文字と音との結びつきが決して自明でないことに気づいたのだ。

さらに、博士は、「バラ／＼の線に過ぎないもの」の集合に意味を持たせてそれを統べているものがあることに思い至り、それが、「文字の靈」なのだと確信して、「文字の靈」の存在を認めたのである。

この発見を手初めに、今迄知られなかつた文字の靈の性質が次第に少しずつ判つて来た。文字の精靈の数は、地上の事物の数程多い、文字の精は野鼠のやうに仔を産んで殖える。

博士は、街中を歩き回って、最近文字を憶えた人々をつかまえて、文字を知る以前と比べて何か変わったところがないかと

尋ねて、「文字の靈」が人間に及ぼす様々な例を集めていく。こうして集めた例から、博士は、「文字の靈の人間に対する作用」の結果を整理して、次の三点にまとめて備忘録に記したのだ。

- ・ 「文字ノ精ガ人間ノ眼ヲ喰イアラスコト、猶、蛆虫ガ胡桃ノ固キ殻ヲ穿チテ、中ノ実ヲ巧ニ喰ヒツクスガ如シ」
- ・ 「文字ノ精ハ人間ノ鼻・咽喉・腹等ヲモ犯スモノノ如シ」
- ・ 「文字ノ害タル、人間ノ頭腦ヲ犯シ、精神ヲ痲痺セシムルニ至ツテ、スナハチ極マル。」

この博士の記した言葉だけを見ると、文字が人間に及ぼす害悪だけを述べているように見えるが、博士は、文字が人間を惹きつける力を持つことにも気づき、そのことに畏怖をすら感じている。さらに、博士は文字を次のように捉えようとする。

埃及人は、ある物の影を、其の物の魂の一部と見做してゐるやうだが、文字は、その影のやうなものではないのか。

文字のなかつた昔は喜びも知恵も直接人間の中に入ってきたが、今では、人間と物事との間に文字が入り込み、文字が世界を整理し、物事を捉える手助けをするようになったのだと博士は考えた。そして、そのために、人間は物事の影しか捉えられず、もはや、文字の助けを借りて書き留めておかなければ、何一つ憶えることも出来なくなつたと考えるようになる。

博士が到達した考えは、文字は人間を疎外するというものがあるが、それは、同時に、人間は文字なしには生きられないものだということでもあった。

博士は、文字が人間を深く病ませるとともに、快楽や幸福をも与えていることを表している典型的な人物として、文字に取り憑かれた「書物狂の老人」を取り上げるのである。この老人は、文字に書かれたあらゆるものを読むことができ、あらゆることを知っているが、現実の自身のこと、自身の身の回りのことを捉え、関わることはできない人物として戯画化して描かれているのだが、同時に、「実に――全く羨ましい程――何時も幸福さうに見える」という点にも博士は着目している。もちろん、博士は、そう見えるのは、「文字の霊の媚薬の如き奸猾な魔力の所為」だと断じるのだが、文字がそれに取り憑かれた人間にある快楽をもたらし、そのことをもしつかりと捉えているのである。

ここで描き出されているのは、文字の持つ恐ろしいほどの力であり、それが多くの人間をとらえ、支配し、その心身に害悪を与える病をもたらしものであるということだが、同時に、人を強く惹きつける力を持っていることをも暗示しているのである。

博士が「文字の霊」の存在を認め、多くの例を集めることによってその力の大きさを知り、恐れさえ抱くようになったのは、一つの文字をじっと見つめているうちに文字が「意味のない一つ一つの線の交錯」にしか見えなくなるという経験をしたからで

あり、文字を分析対象として凝視することによって、文字の持つ不思議な力に気づいたからである。博士は、その後、自分を取り巻く世界をも一つ一つの要素に分解して理解しようとするようになり、それが、後に博士自身が恐れることになる自身の「分析病」の自覚へと繋がっているのだと考えられる。

四 小説の中のもう一つの物語―帝国と歴史に関わる物語について

小説内では、この後、ナブ・アヘ・エリバ博士による「文字の霊」の探求という物語から少し脇道に逸れるように、若い歴史家、イシュディ・ナブが博士のもとを訪れるというエピソードが描かれる。

まずは、若い歴史家が博士に自分が抱えている疑問を打ち明ける部分を読んでみよう。

先頃のバビロン王シヤマシユ・シユム・ウキンの最期について色々な説がある。自ら火に投じたことだけは確かだが、最後の一月程の間、絶望の余り、言語に絶した淫蕩の生活を送ったといふものもあれば、毎日ひたすら潔斎してシヤマシユ神に祈り続けたといふものもある。第一の妃唯一人と共に火に入つたといふ説もあれば、数百の婢妾を薪の火に投じてから自分も火に入つたといふ説もある。何しろ文字通り煙になつたこととて、どれが正しいのか一向見当がつかない。

王の命により歴史を記述することを職務としているイシュディ・ナブにとつて、目下の一の問題は、バビロン王の最期について伝えられる様々な説の中からどれを選び、それをどう記録するかということである。ここで、小説の冒頭で少し触れられただけだった、大王の兄シャマシユ・シユム・ウキンが大王に対して謀反を起こし、それが鎮圧されたという、この小説における第二の物語が小説の表舞台に現れてくるのである。

若い歴史家は、続けて博士に尋ねる。「近々、大王は其等の中の一つを選んで、自分にそれを記録するやう命じ給ふであらう。これはほんの一例だが、歴史とは之でいゝのであらうか」と。彼の中には、歴史記述とは一つの確かな事実に基づいてなされるべきものであり、その事実を正確に写し取ることが歴史記述だという考えがあるのだと読める。だとすれば、事実関係を明確に確定できない出来事をどう記録するのか、さらに、もし、事実と背くことが書き残されることになれば、それが歴史上の事実となってしまうが、それでいいのかというのが、イシュディ・ナブの悩みなのだ。

博士が沈黙を守っているのを見て、若い歴史家は言葉を変えて、さらに、問いかける。「歴史とは、昔、在つた事柄をいふのであらうか？ それとも、粘土板の文字をいふのであらうか？」と。

この問いかけを聞きながら、老博士は、「獅子狩と、獅子狩の浮彫とを混同してゐるやうな所が此の問の中にある」と思うの

だ。「獅子狩」というのは、イシュディ・ナブの言う「昔在つた事柄」であり、「獅子狩の浮彫」とは、「粘土版の文字」と言い換えられるだろう。老博士にとつては、この二つは別のものだとは考えられないのだ。「昔在つた事柄」というのは、観念上のものにすぎず、文字に残されていない事柄は、存在しないのと同じだというのが博士が至り着いた考えである。「歴史とは、昔在つた事柄で、且つ粘土板に誌されたものである。この二つは同じことではないか」という博士の言葉にはそういう思いがはっきりと現れている。

それに対して、歴史家は再度問いかける。「書洩らしは？」と。この問いかけに対する博士の答えが、この小説の重要なポイントとなる箇所なので引用しておこう。

書洩らし？ 冗談ではない、書かれなかつた事は、無かつた事ぢや。芽の出ぬ種子は、結局初めから無かつたのぢやわい。歴史とはな、この粘土板のことぢや。(中略) 文字の精共が、一度或る事柄を捉へて、之を己の姿で現すとなると、その事柄は最早、不滅の生命を得るのぢや。反対に、文字の精の力ある手に触れなかつたものは、如何なるものも、その存在を失はねばならぬ。

ナブ・アヘ・エリバ博士は、自身が「文字の霊」の存在を確信した、その確信に基づいて若い歴史家の疑問に答えているの

だ。

もし、人間が文字を通してしかものを捉えられなくなっているのだとしたら、文字に記されていないことは無かったことなのだから、歴史とは、文字に記された粘土板のことだ、文字に残されたことが事実になるのだと、若い歴史家に断言しているのである。さらに、博士は言う。「歴史」というものも、「文字の霊」の命ずるままに綴られるもので、歴史家の作為の入る余地はないと。「君やわしら[、]が、文字を使つて書きものをしとるな^どと思つたら大間違ひ。わしら[、]こそ彼等文字の聖霊にこき使はれる下僕^{しもべ}ぢや」とまで付け加えるのだ。

ここで、ナブ・アヘ・エリバ博士は、若い歴史家が信じてきた歴史観を徹底的に否定するのである。

この部分は、物語の展開としては、博士が「文字の霊」の威力を讚美するようになり、彼自身次第に「文字の霊」の病に冒されていく経緯を描いていると読める。しかし、第二の物語を合わせた小説全体の展開の中で見てみると、ある違和感を感じさせるように書かれていることに気づく。

「語り手」は、冒頭で簡単に触れただけの、王兄シャマシュ・シム・ウキンの謀反とその鎮圧、そして、その後の俘囚達に対する残酷な処刑に関わる出来事が、ここで改めて読者の意識に浮かび上がるように語っていたのだ。そして、この一連の出来事が大王の心に動揺をもたらし、それが国全体の問題となり、それまでその存在さえ知られていなかった「文字の霊」の出現

という事態となり、ナブ・アヘ・エリバ博士が「文字の霊」を研究するという物語が展開していくように語るのだ。このように読むと、ここから、博士による「文字の霊」の探求という表の物語と大王と兄バビロン王との確執と大王による謀反の鎮圧の物語とが、密接に関わりながら、小説のクライマックスへと物語が急展開していくように書かれていることがわかるのだ。

五 クライマックスへ向けて、そして、作品のテーマについて

再度、「文字禍」の冒頭部分を思い起こしてみよう。「語り手」は、「文字の霊などというものが、一体、あるものか、どうか」と問いかけた後、次のように言葉を続けていた。

アッシリヤ人は無数の精霊を知つてゐる。夜、闇の中を跳梁するリル、その雌のリリツ、疫病をふり撒くナムタル、死者の霊エティンム、誘拐者ラバス等、数知れぬ悪霊共がアッシリヤの空に充ち満ちてゐる。しかし、文字の精霊に就いては、まだ誰も聞いたことがない。

ここからは、現代を生きる「語り手」は、「文字の霊」の存在をそのまま信じているわけではないことがわかる。

そこで、「語り手」がまず語り始めるのは、図書館の闇の中で「ひそ／＼と怪しい話し声がする」という噂についてだ。さらに、

「語り手」は、アシュル・バニ・アバル大王の兄であるバビロン王のシャマシユ・シユム・ウキンの謀反がバビロンの落城とともに鎮圧され、バビロンからの俘囚たちが処刑された経緯を語り、図書館の怪しい話し声がその時に殺された俘囚共の死霊の声だという噂をわざわざ持ち出した上で、舌を抜かれた俘囚共の死霊がしゃべれるわけがないと、その噂が否定されたことを読者に知らせるのである。

「語り手」が、舌を抜かれた俘囚共のことをあえて取り上げて語っているのは、残酷な行爲を行った大王の狙いに読者の眼を向けさせるためだったのではないか。大王は、生き残った者たちや死霊となった俘囚たちが「事」の経緯を語り伝えることを恐れたのだと読むことができる。そして、そこには、兄を亡き者にしても自らの治世を万全なものにしようとする大王の意図が透けて見えるのである。

このように読んでくると、文字が人間に対して強い力を持つことを大王自身が熟知していたことがわかる。そして、兄王の死と俘囚たちの処刑と、あまり時をおかずに「図書館での怪しい声」が宮廷内で噂になるのだ。この「怪しい声」について、「星占や羊肝卜」での探索も空しく、それが「文字共の話し声と考へるより外はな」となった時、大王は、文字の持つ未知の強い力に不安を覚え、改めて「文字」が人間に及ぼす影響やその利用の仕方について、さらには、そもそも「怪しい話し声」の正体は何かということについて、ナブ・アヘ・エリバ博士に調

査するように命じたのだ。

大王の命に従って、博士は、「日毎問題の図書館（中略）に通つて万巻の書に目を」通すのだが、「文字の霊」についての説を見出すことはできなかった。図書館のあらゆる文献には、「文字の霊」など存在しなかったのである。

博士は、そこで、大王の命の意図するところから逸れて、独自に文字の研究を続けていくうちに、「文字の霊」が存在することを確信するようになり、人間が文字に触れることにより文字に支配され、文字によって操られるようになると理解するようになったのだ。さらに、彼が理解したことを若い歴史家に伝えた後、博士は、「文字の霊」が人間にもたらす禍を心底恐ろしいと感じて、その報告を大王に進言するのである。以下のように。

武の国アッシリヤは、今や、見えざる文字の精霊のために、全く蝕まれて了つた。しかも、之に気付いてゐる者は殆ど無い。今にして文字への盲目的崇拜を改めずんば、後に臍を嚙むとも及ばぬであらう云々。

博士のこの報告を、「語り手」は、「文字の霊が、この讒謗者をただで置く訳が無い」と語る。「語り手」は、博士の報告に対する大王の対応を、まるで「文字の霊」による博士に対する復讐であるかのように語っているが、もし、博士のことを「ただで置く訳がない」と考えるのが「文字の霊」ではないとすれば

どうだろうか。この先を読むと、それが暗示されている。「ナブ・アヘ・エリバの報告は、いたく大王の御機嫌を損じた」と書かれているのである。さらに、「大王の幼時からの師^し傳^{ふた}たるナブ・アヘ・エリバでなかつたら、恐らく、生きながらの皮剥に処せられたであらう」と大王の博士に対する怒りが非常に激しいものであったことも書き添えられている。ここで重要なのは、大王が博士に強い怒りを感じ、博士のことを危険視した理由である。そこには、第二の物語として目立たないように語られてきた大王とその兄のバビロン王シャマシユ・シユム・ウキンとの対立とその鎮圧のエピソードが関わっているのである。

大王は、戦いの勝者として、自分に都合の悪いことは一切記録として残すことなく、兄のバビロン王を、大王に背いて謀反を起こした罪人として歴史に残して、大王の権威をさらに確実なものにしようとしたのだと先に述べた。だから、噂になった図書館の「怪しい話し声」についても、その正体と、文字の持つ未だ知られざる性質を説明して、大王の意図を妨げるものを排除しようとしたのではないだろうか。そのために、博士に「文字の霊」の研究を命じたのだと私は考える。しかし、博士は、「文字の霊」の存在とその及ぼす禍を確信したことで、「文字の霊」による禍がもたらされるのを恐れて、大王に、文字への盲目的崇拜をやめるように進言するのである。その際に、博士は、その報告に「若干の政治的意見を加へ」て、自らの主張により強い根拠を持たせようとしたのであろうが、それが大王を激怒さ

せてしまうのだ。自らの権威を確実なものにしようとしていた大王は、博士がその「政治的意見」によって大王の権威を批判していると捉えたのだ。そして、博士も兄のバビロン王と同様に大王に反発し、対抗する立場に立とうとしてっていると受け止めて、即日謹慎を命じたのだと考えられる。

このように捉えると、博士の死も、地震による偶然的死でも、「文字の霊」による復讐でもない可能性も生まれてくるのである。しかし、「語り手」は、何が本当なのかを明らかにせず、大地震の中で、「重い粘土板が、文字共の凄まじい呪の声と共に此の讒謔者の上に落ちかゝり」、博士が「無慙に圧死した」と語って、読者に、博士の地震による死には大王の思惑が絡んでいるのではないかということをほのめかすにとどめて、物語を閉じるのである。

ここで、さらに付け加えると、博士に対する怒りには、文字の持つ恐ろしい力に対する大王の恐れもあったと私は解釈した。文字の持つ力を熟知し、それを利用してきたはずの大王が、図書館の「怪しい声」の噂が広まると、博士に「文字の霊」の研究を命じたのだ。それは、大王が、文字にはまだ知られていない恐ろしい力があると感じ、その文字の恐ろしさが彼の安定した権力を裏切ることを恐れたからでもあったのだろう。博士の報告は、そのことを裏付けてもいたのだ。「武の国アッシリヤは、今や、見えざる文字の聖霊のために、全く蝕まれて了った」と。これは、文字を司る「ナブウ神の熱烈な讃仰者で当時第一流の

文化人たる大王」の治世を全面的に否定する言葉ともなってしまうのだ。大王が博士を遠ざけたのは当然のことだったのである。

物語はここで閉じられるが、小説はここで終わっているわけではない。確かに博士の死によって大王の意図したとおりの歴史が残されたのであろうが、「文字」には、大王が恐れたであろう、権力者の意図を超える側面もあることを最後に見ておきたい。

六 まとめ 「文字の霊」といふものが、一体、あるものか、どうか

さて、ここまで本稿では、「文字」と「歴史」と「権力」の関係から作品を読み直してきた。その上で、本章においては、「文字」は権力に奉仕するだけではなく、その権力を歴史の中で相対化する媒体でもあることを付け加えておきたい。

前章の終わりに、「小説はここで終わっているわけではない」と書いたのは、言葉・文字の力を利用した権力による歴史の誕生の物語の向こう側に、権力の意図をも超えた「文字」の恐ろしい力があることを見ておきたかったからだ。博士は死に、大王の意図した通りの歴史が残されたのだと推測されるが、実は権力が永遠のものではないことは歴史そのものが証明しているのである。大王の願いも空しくアッシリア帝国は、大王の死後直ぐに滅亡を迎えるのであり、さらに、彼によって残された歴史記述を含む膨大な粘土板を貯蔵していた図書館も、この

物語の時代から二百年後には、土に埋もれ、さらに、それから二千三百年後に発掘されるまで、歴史の表舞台から消されてしまうのである。ここからは、権力者が自ら望む歴史を文字に残したとしても、その文字自体が時代を超えて、読者に権力の作為をそのまま信じさせるとは限らないということが読み取れる。

アシュル・バニ・アバル大王に即して言えば、歴史を書いた時点では大王が勝利したのだが、その文字を読むのは、大王ではなく、後世の読者なのである。しかも、その文字が後世の読者に読まれるかどうか、偶然に左右されるしかないのである。権力者は文字を書くことはできても、その文字が未来においてどのように読まれるかまで見通すことはできないのである。この逆説こそが、中島敦が描こうとした「文字禍」の世界ではないだろうか。

このように捉えると、「語り手」がその存在を明らかにすることなく、「文字の霊」といふものが、一体、あるものか、どうか」と冒頭で問いかけた言葉が、現代の読者の心に改めて蘇ってくるのではないだろうか。そして、そこから、読者一人一人が文字の持つ力について考える契機が生まれてくるのだと考えたい。

「文字禍」という小説をこのように読んでくると、「語り手」は、現代、すなわち、中島敦がこの小説を書いている太平洋戦争下においても、「歴史」は、このような権力者の意図に添うように作られつつあることが読者に問いかけているようにも読める。

文字禍

中 島 敦

しかし、その上で、権力者の思いを超えて、文字の力は未来の読者へと影響を及ぼしていくことをも読者に伝えようとしていると読みたいのだ。

この小説のタイトルが「文字禍」、すなわち、文字のもたらす「わざわざ」と名付けられたのは、博士の恐れを現実化し、大王の意図を実現させた上で、それらの思いや意図を全て歴史の深い闇の奥底へと沈めてしまう文字の持つ恐ろしい力を表現したかったからではないか。その力は、博士や大王にとっても大きな「わざわざ」となるのである。

本稿は、このような権力者の意図を超えて未来の読者に向けて作用し続ける文字の力、その恐ろしさこそが、「文字禍」というタイトルに込められた意味であると考えた。

この作品を読む私たち読者は、権力が作る「歴史」だけではなく、その「歴史」に変容を迫ることさえできる「文字」の持つ不思議で恐ろしい力を受け止めなければならないのである。

付記 「文字禍」本文は『中島敦全集』（筑摩書房二〇〇一

年刊）によったが、旧字体で書かれているものは原則として新字体に改めた。ルビについては適宜省略した箇所もある。

文字の霊などというものが、一体、あるものか、どうか。

アッシリヤ人は無数の精霊を知っている。夜、闇の中を跳梁するリル、その雌のリリツ、疫病をふり撒くナムタル、死者の霊エティンム、誘拐者ラバス等、数知れぬ悪霊共がアッシリヤの空に充ち満ちている。しかし、文字の精霊については、まだ誰も聞いたことがない。

その頃——というのは、アシュル・バニ・アバル大王の治世第二十年目の頃だが——ニネヴェの宮廷に妙な噂があつた。毎夜、図書館の闇の中で、ひそひそと怪しい話し声がするという。王兄シャマシユ・シユム・ウキンの謀叛がバビロンの落城でようやく鎮まったばかりのこととて、何かまた、不逞の徒の陰謀ではないかと探ってみたが、それらしい様子もない。どうしても何かの精霊どもの話し声に違いない。最近に王の前で処刑されたバビロンからの俘囚共の死霊の声だろうという者もあったが、それが本当でないことは誰にも判る。千に余るバビロンの俘囚はことごとく舌を抜いて殺され、その舌を集めたところ、

小さな築山^{つきさん}が出来たのは、誰知らぬ者のない事実である。舌の無い死霊に、しゃべれる訳がない。星占^{ほしうらひ}や羊肝^{ようかん}トで空しく探索した後、これはどうしても書物共あるいは文字共の話し声と考えるより外はなくなった。ただ、文字の霊（というものが在るとして）とはいかなる性質をもつものか、それが皆目^{かいもく}判らない。アシユル・バニ・アパル大王は巨眼^{きょがん}縮^{しゆく}髪^{はつ}の老博士ナブ・アヘ・エリバを召して、この未知の精霊についての研究を命じたもようた。

その日以来、ナブ・アヘ・エリバ博士は、日ごと問題の図書館（それは、その後二百年にして地下に埋没し、更に二千三百年にして偶然発掘される運命をもつものであるが）に通つて万巻の書に目をさらしつゝ研鑽^{けんさん}に耽^{ふけ}つた。両河^{メソポタミア}地方では埃及と違つて紙^{ペピ}草を産しない。人々は、粘土の板に硬筆をもつて複雑な楔形の符号を彫りつけておつた。書物は瓦であり、図書館は瀬戸物屋の倉庫に似ていた。老博士の卓子^{アイブル}（その脚には、本物の獅子^{しし}の足が、爪さえそのままに使われている）の上には、毎日、累々たる瓦の山がうずたかく積まれた。それら重量ある古知識の中から、彼は、文字の霊についての説を見出そうとしたが、無駄であつた。文字はボルシツパなるナブウの神の司^{つかさど}りたもう所とより外には何事も記されていないのである。文字に霊ありや無しやを、彼は自力で解決せねばならぬ。博士は書物を離れ、ただ一つの文字を前に、終日それと睨^{にら}めつこをして過した。卜者^{うらなひ}は羊の肝臓を凝視することによつてすべての事象を直観する。

彼もこれに倣^{なま}つて凝視と静観とによつて真実を見出そうとしたのである。その中に、おかしな事が起つた。一つの文字を長く見詰めている中に、いつしかその文字が解体して、意味の無い一つ一つの線の交錯^{こうさく}としか見えなくなつて来る。単なる線の集りが、なぜ、そういう音とそういう意味とを有^もつことが出来るのか、どうしても解らなくなつて来る。老儒^{ろうじゆ}ナブ・アヘ・エリバは、生れて初めてこの不思議な事実を発見して、驚いた。今まで七十年の間当然と思つて看過していたことが、決して当然でも必然でもない。彼は眼から鱗^{うろこ}の落ちた思がした。単なるバラバラの線に、一定の音と一定の意味とを有たせるものは、何か？　ここまで思い到つた時、老博士は躊躇なく、文字の霊の存在を認めた。魂によつて統べられない手・脚・頭・爪・腹等が、人間ではないように、一つの霊がこれを統べるのでなくて、どうして単なる線の集合が、音と意味とを有つことが出来るか。この発見を手始めに、今まで知られなかつた文字の霊の性質が次第に少しずつ判つて来た。文字の精霊の数は、地上の事物の数ほど多い、文字の精は野鼠^{のほみ}のように仔を産んで殖える。

ナブ・アヘ・エリバはニネヴェエの街中を歩き廻つて、最近に文字を覚えた人々をつかまえては、根気よく一々尋ねた。文字を知る以前に比べて、何か変つたようなところはないかと。これによつて文字の霊の人間に対する作用を明らかにしようというのである。さて、こうして、おかしな統計が出来上つた。それによれば、文字を覚えてから急に蝨^{しらみ}を捕るのが下手になつた

者、眼に埃が余計はいるようになった者、今まで良く見えた空の鷺の姿が見えなくなつた者、空の色が以前ほど碧くなくなつたという者などが、圧倒的に多い。「文字ノ精ガ人間ノ眼ヲ喰イアラスコト、猶、蛆虫ガ胡桃ノ固キ殻ヲ穿チテ、中ノ実ヲ巧ニ喰イツクスガ如シ」と、ナブ・アヘ・エリバは、新しい粘土の備忘録に誌した。文字を覚えて以来、咳が出始めたという者、くしゃみが出るようになって困るという者、しゃっくりが度々出るようになった者、下痢するようになった者なども、かなりの数に上る。「文字ノ精ハ人間ノ鼻・咽喉・腹等ヲモ犯スモノノ如シ」と、老博士はまた誌した。文字を覚えてから、にわかに頭髮の薄くなつた者もいる。脚の弱くなつた者、手足の顫えるようになった者、顎がはずれ易くなつた者もいる。しかし、ナブ・アヘ・エリバは最後にこう書かねばならなかつた。「文字ノ害タル、人間ノ頭腦ヲ犯シ、精神ヲ癡痺セシムルニ至ツテ、スナワチ極マル。」文字を覚える以前に比べて、職人は腕が鈍り、戦士は臆病になり、獵師は獅子を射損うことが多くなつた。これは統計の明らかに示す所である。文字に親しむようになってから、女を抱いても一向楽しゅうなくなつたという訴えもあつた。もつとも、こう言出したのは、七十歳を越した老人であるから、これは文字のせいではないかも知れぬ。ナブ・アヘ・エリバはこう考へた。埃及人は、ある物の影を、その物の魂の一部と見做しているようだが、文字は、その影のようなものではないのか。獅子という字は、本物の獅子の影ではないのか。それで、獅

子という字を覚えた獵師は、本物の獅子の代りに獅子の影を狙い、女という字を覚えた男は、本物の女の代りに女の影を抱くようになるのではないか。文字の無かつた昔、ビル・ナビシユチムの洪水以前には、欲びも智慧もみんな直接に人間の中にはいつて来た。今は、文字の薄被をかぶつた欲びの影と智慧の影としか、我々は知らない。近頃人々は物憶えが悪くなつた。これも文字の精の悪戯である。人々は、もはや、書きとめておかなければ、何一つ憶えることが出来ない。着物を着るようになって、人間の皮膚が弱く醜くなつた。乗物が發明されて、人間の脚が弱く醜くなつた。文字が普及して、人々の頭は、もはや、働かなくなつたのである。

ナブ・アヘ・エリバは、ある書物狂の老人を知っている。その老人は、博学なナブ・アヘ・エリバよりも更に博学である。彼は、スメリヤ語やアラメヤ語ばかりでなく、紙草や羊皮紙に誌された埃及文字まですらすらと読む。およそ文字になつた古代のことで、彼の知らぬことはない。彼はツクルチ・ニニブ一世王の治世第何年目の何月何日の天候まで知っている。しかし、今日の天気は晴か曇か気が付かない。彼は、少女サビツがギルガメシユを慰めた言葉をも語んじている。しかし、息子をなくした隣人を何と言つて慰めてよいか、知らない。彼は、アダツド・ニラリ王の後、サンムラマトがどんな衣装を好んだかも知っている。しかし、彼自身がどんな衣服を着ているか、まるで気が付いていない。何と彼は文字と書物とを愛したのであろ

う！読み、讀んじ、愛撫するだけではあきたらず、それを愛するの余りに、彼は、ギルガメシ伝説の最古版の粘土板を噛砕き、水に溶かして飲んでしまったことがある。文字の精は彼の眼を容赦なく喰い荒し、彼は、ひどい近眼である。余り眼を近づけて書物ばかり読んでいたので、彼の鷲形の鼻の先は、粘土板と擦れ合つて固い胼胝が出来ている。文字の精は、また、彼の脊骨をも蝕み、彼は、臍に頸のくつきそうな僂僂である。しかし、彼は、恐らく自分が僂僂であることを知らないであらう。僂僂という字なら、彼は、五つの異つた国の字で書くことが出来るのだが。ナブ・アヘ・エリバ博士は、この男を、文字の精霊の犠牲者の第一に数えた。ただ、こうした外観の惨めさにもかかわらず、この老人は、実に——全く羨ましいほど——いつも幸福そうに見える。これが不審といえは、不審だつたが、ナブ・アヘ・エリバは、それも文字の霊の媚薬のごとき奸猾な魔力のせいと見做した。

たまたまアシウル・パニ・アパル大王が病に罹られた。侍医のアラッド・ナナは、この病輕からずと見て、大王のご衣裳を借り、自らこれをまとうて、アッシリヤ王に扮した。これによつて、死神エレシユキガルの眼を欺き、病を大王から己の身に転じようというのである。この古来の医家の常法に対して、青年の一部には、不信の眼を向ける者がある。これは明らかに不合理だ、エレシユキガル神ともあろうものが、あんな子供騙しの計に欺かれるはずがあるか、と、彼等は言う。碩学ナブ・アヘ・

エリバはこれを聞いて厭な顔をした。青年等のごとく、何事にも辻褄を合せたがることの中には、何かしらおかしな所がある。全身垢まみれの男が、一ヶ所だけ、例えば足の爪先だけ、無闇に美しく飾っているような、そういうおかしな所が。彼等は、神秘の雲の中における人間の地位をわきまえぬのじゃ。老博士は浅薄な合理主義を一種の病と考えた。そして、その病をはやらせたものは、疑もなく、文字の精霊である。

ある日若い歴史家（あるいは宮廷の記録係）のイシュデイ・ナブが訪ねて来て老博士に言つた。歴史とは何ぞや？と。老博士が呆れた顔をしているのを見て、若い歴史家は説明を加えた。先頃のバビロン王シャマシユ・シム・ウキンの最期について色々な説がある。自ら火に投じたことだけは確かだが、最後の一月ほどの間、絶望の余り、言語に絶した淫蕩の生活を送つたというものもあれば、毎日ひたすら潔斎してシャマシユ神に祈り続けたというものもある。第一の妃ただ一人と共に火に入つたという説もあれば、数百の婢妾を薪の火に投じてから自分も火に入つたという説もある。何しろ文字通り煙になつたこととて、どれが正しいのか一向見当がつかない。近々、大王はそれらの中の一つを選んで、自分にそれを記録するよう命じたものであらう。これはほんの一例だが、歴史とはこれでもいいのであらうか。

賢明な老博士が賢明な沈黙を守っているのを見て、若い歴史家は、次のような形に問を変えた。歴史とは、昔、在つた事柄

をいうのであろうか？ それとも、粘土板の文字をいうのであろうか？

獅子狩と、獅子狩の浮彫とを混同しているような所がこの間の中にある。博士はそれを感じたが、はつきり口で言えないので、次のように答えた。歴史とは、昔在った事柄で、かつ粘土板に誌されたものである。この二つは同じことではないか。

書洩らしは？ と歴史家が聞く。

書洩らし？ 冗談ではない、書かれなかった事は、無かった事じゃ。芽の出ぬ種子は、結局初めから無かったのじゃわい。歴史とはな、この粘土板のことじゃ。

若い歴史家は情なさそうな顔をして、指し示された瓦を見た。それはこの国最大の歴史家ナブ・シャリム・シユヌ誌す所のサルゴン王ハルディア征討行の一枚である。話しながら博士の吐き棄てた柘榴の種子がその表面に汚らしくくっついていてる。

ボルシツパなる明智の神ナブウの召使いたもう文字の精霊共の恐しい力を、イシュディ・ナブよ、君はまだ知らぬとみえるな。文字の精共が、一度ある事柄を捉えて、これを己の姿で現すとなると、その事柄はもはや、不滅の生命を得るのじゃ。反対に、文字の精の力ある手に触れなかったものは、いかなるものも、その存在を失わねばならぬ。太古以来のアヌ・エンリルの書に書上げられていない星は、なにゆえに存在せぬか？ それは、彼等がアヌ・エンリルの書に文字として載せられなかったからじゃ。大マルズック星（木星）が天界の牧羊者（オリオ

ン）の境を犯せば神々の怒が降るのも、月輪の上部に蝕が現れればフモオル人が禍を蒙るのも、皆、古書に文字として誌されてあればこそじゃ。古代スメリヤ人が馬という獣を知らなんだのも、彼等の間に馬という字が無かったからじゃ。この文字の精霊の力ほど恐ろしいものは無い。君やわしらが、文字を使って書きものをしとるなどと思つたら大間違い。わしらこそ彼等文字の精霊にこき使われる下僕じゃ。しかし、また、彼等精霊の齋す害も随分ひどい。わしは今それについて研究中だが、君が今、歴史を誌した文字に疑を感じるようになったのも、つまりは、君が文字に親しみ過ぎて、その霊の毒氣に中つたためであらう。

若い歴史家は妙な顔をして帰って行つた。老博士はなおしばらく、文字の霊の害毒があつた青年をも害おうとしていることを悲しんだ。文字に親しみ過ぎてかえつて文字に疑を抱くことは、決して矛盾ではない。先日博士は生来の健康に任せて羊の炙肉をほとんど一頭分も平らげたが、その後当分、生きた羊の顔を見るのも厭になつたことがある。

青年歴史家が帰ってからしばらくして、ふと、ナブ・アヘ・エリバは、薄くなつた縮れつ毛の頭を抑えて考え込んだ。今日は、どうやら、わしは、あの青年に向つて、文字の霊の威力を讚美しはせんんだか？ いまいましいことだ、と彼は舌打をした。わしまでが文字の霊にたぶらかされておるわ。

実際、もう大分前から、文字の霊がある恐しい病を老博士の

上に齎^{もたら}していたのである。それは彼が文字の霊の存在を確かめるために、一つの字を幾日もじつと睨^{にら}み暮した時以来のことである。その時、今まで一定の意味と音とを有^もっていたはずの字が、忽然と分解して、単なる直線どもの集りになってしまったことは前に言った通りだが、それ以来、それと同じような現象が、文字以外のあらゆるものについても起るようになった。彼が一軒の家をじつと見ている中に、その家は、彼の眼と頭の中で、木材と石と煉瓦と漆喰^{しっくい}との意味もない集合に化けてしまう。これがどうして人間の住む所でなければならぬか、判らなくなる。人間の身体を見ても、その通り。みんな意味の無い奇怪な形をした部分部分に分析されてしまう。どうして、こんな恰好をしたものが、人間として通っているのか、まるで理解できなくなる。眼に見えるものばかりではない。人間の日常の営み、すべての習慣が、同じ奇体な分析病のために、全然今までの意味を失ってしまった。もはや、人間生活のすべての根柢^{こんてい}が疑わしいものに見える。ナブ・アヘ・エリバ博士は気が違^{ちが}いそうになって来た。文字の霊の研究をこれ以上続けては、しまいにその霊のために生命をとられてしまうぞと思った。彼は怖^{こわ}くなって、早々に研究報告を纏^{まと}め上げ、これをアシウル・パニ・アパル大王に献じた。但し、中に、若干の政治的意見を加えたことはもちろんである。武の国アッシリヤは、今や、見えざる文字の精霊のために、全く蝕^くまれてしまった。しかも、これに気付いている者はほとんど無い。今にして文字への盲目的崇拜を改めずんば、後に臍^{はら}を

噬^くむとも及ばぬであらう云々。

文字の霊が、この讒^{ざん}謗^{ぼう}者をただで置く訳が無い。ナブ・アヘ・エリバの報告は、いたく大王のご機嫌を損じた。ナブウ神の熱烈な讃仰者で当時第一流の文化人たる大王にしてみれば、これは当然のことである。老博士は即日謹慎を命ぜられた。大王の幼時からの師傳^{しふでん}たるナブ・アヘ・エリバでなかったら、恐らく、生きながらの皮剥^{かわはぎ}に処せられたであろう。思わぬご不興に愕然とした博士は、直ちに、これが奸^{かん}譎^{けつ}な文字の霊の復讐であることを悟った。

しかし、まだこれだけではなかった。数日後ニネヴェ・アルベラの地方を襲った大地震の時、博士は、たまたま自家の書庫の中にいた。彼の家は古かったので、壁が崩れ書架が倒れた。夥^{おほ}しい書籍が――数百枚の重い粘土板が、文字共の凄まじい呪^{のろ}いの声と共にこの讒謗者の上に落ちかかり、彼は無慙^{むげん}にも圧死した。

(昭和十七年二月)

底本…「ちくま日本文学全集 中島敦」

ちくま文庫、筑摩書房一九九二(平成四)年七月

二〇日発行

「青空文庫」より

ただし、振り仮名については適宜省略した。

【編集後記】

八月十五日の一日を大岡昇平「レイテ戦記」を拾い読みして過すことが習慣になって久しい。レイテ島で絶望的な戦いを戦い死んでいった兵士達の物語は、ウクライナでもパレスチナでもイランでも繰り返されているのだろう。戦争が人と人の戦いでなく、ミサイルやドローンによる破壊の様相を呈してきたにしろ、戦火に曝される悲惨は今も変わりはない。「レイテ戦記」が闘いの記録としてではなく、我々が今日「イリアス」を読むように読むことができるような時代は来るのであろうか。

今号には角谷有一のご尊父である故角谷次吉氏の手記を掲載する。遺品整理をしているときに見つけたものという。若き医学徒が昭和二十年前後の東京で過ごした空襲の日々を活写している。死と向きあった記録は戦没学徒の手記をはじめ数が多いが、生と向きあった若者の記録はほとんど読んだ記憶がない。手記を活字にしていると聞き、「Figures」掲載を慫慂したのである。

天皇家の皇位継承をめぐって、皇室典範の改正が行われ、(一)女性皇族が結婚後も皇族に残る、(二)旧皇族の男系男子を養子に迎えることができる。養子本人には皇位継承資格がないが、

生まれる男系男子は皇位継承資格を持つ、の二点が追加された。男系男子を皇統とする制度は明治政府が定めた近代的な考え方で、天皇の政治利用そのものである。尊王攘夷で権力を握るとたちまち文明開化の鹿鳴館で、祇園の芸者を引き連れた東漸は、錦の御旗を安定した権力基盤とするため新しい神話を必要とした。それが大日本帝国憲法である。今読んでもなかなか格調が高い。

第一条 大日本帝国ハ万世一系ノ天皇之ヲ統治ス

第二条 皇位ハ皇室典範ノ定ムル所ニ依リ皇男子孫之ヲ継承

ス

第三条 天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス

天皇家の意向を無視して、赤の他人である時の権力者が勝手にどうこうしたのは明治政府であり、皇室典範はその戦後版で、皇統は神武以来の万世一系、男系男子が継承してきたという神話の復活である。明治時代は側室制度が健全であったし、そもそも後宮を前提にしなければ、確率的にいつても男系男子が連綿と続くことはなかったであろう。皇室典範で皇統を継ぐ者は男系男子に限るとしてあるなら、時の権力者がそれを修正すれば済む話なのだ。

実際に正統な後継者がいるにもかかわらず、神武だの桓武だの、どうでもいい作り話をもちだして、いったい今の政治家は何がしたいのだろう。皇統は男系男子でつながってきたのだから

これから男系男子でいこうよ、という程度の話なのである。仮に万世一系だとして、それならどうして「天皇家」の意向を無視して決めるのであろうか。赤の他人が勝手に決めるのは、人権蹂躪・人権無視ではないのか。誰を跡取りとするか、国民や国民の代表たる国会議員が決めることではない。ましてや総理大臣や、総理大臣経験者が勝手に自分のイデオロギーで決める話ではない。

天皇家というのは、いわば日本で最も古い「旧家」である。そして旧家の没落の物語は、藤村やトーマス・マンが哀惜の念をもって描きだしてきたテーマでもある。

天皇家の事は天皇家に任せること、天皇家の家族としての意志を尊重すれば足りるのではないだろうか。すくなくとも法律の枠組みでどうこうできる問題ではなく、天皇陛下のご意見をしっかりとかがうところから始めるべき問題である。

閑話休題。この号が出るころには「Figures」のホームページが立ち上がっています。PDF版で既刊分も含めダウンロードできるようにしてありますので、関心のある向きは利用してください。デジタルリサーチのホームページ (<https://digital-research.co.jp/>) にアクセスのうえ「Figures」のリンクをたどってください。

「中手記」や戦前の文章をもとにして鮎川の戦後詩の根拠となつた発想と、石原の詩を成り立たせている根拠を比較しようと思つて書き始めたが、次号（2026年12月刊）に回します。

（遠藤記）

「石原吉郎と香月泰男（二）」（遠藤雅樹）は、鮎川信夫の「戦

【会合案内】

編集会議：2026年10月2日（金） 於彦根「文豪カフェ」（予定）

Figures 2026年8月号（No.4）

頒価500円（送料込）

2026年8月28日発行

編集発行人 遠藤雅樹

発行所 （有）デジタルリサーチ

〒460-0008 名古屋市中区栄 2-10-19 名古屋商工会議所ビル 11F

TEL：052-221-6616 / landsendlive@gmail.com

印刷 （株）東海共同印刷

Digital Research Institute, Inc.